

# 終生、新渡戸稻造を師と仰ぐ 北海道の中等教育を確立した

## 山田幸太郎

### 人づくりの人脈

明治二年、開拓使の設置により北海道の開拓が始まった。そのための人材養成は札幌農学校の設置によって本格化するが、当初の卒業生の一人、新渡戸稻造（二期生）は、母校教授から雄飛し世界に貢献する。

新渡戸稻造は、明治二十四年に北鳴学校を創設、翌年本道初の私立中学校となる。これに刺激され、明治二八年本道に序立の札幌中学（現、札幌南高等学校）が創設される。しかし、草創期の校長に人を得ず、道府長官河島醇（はる）は、愛媛県大洲中学校長の山田幸太郎に

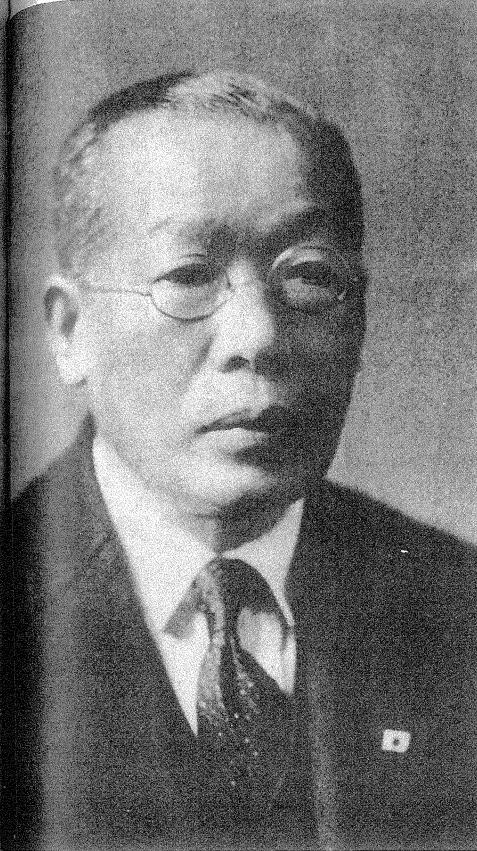
白羽の矢を立て來道を懇請する。これにこたえ山田幸太郎は明治四一年、第七代校長として序立札幌中学校に赴任することとなつたのである。

大洲といえども緒方洪庵、佐久間象山の弟子で、箕作阮甫に師事した武田斐三郎の出身地である。武田斐三郎は幕末に箱館奉行支配諸術調所を経営し、洋学を教授するとともに、航海術及び測量の実際を指導し、沿海州まで航海した。前島密、井上勝らはその教え子である。こうした蝦夷地の夜明けを山田幸太郎が熟知していないはずはなかつた。

山田幸太郎は、明治四年に金沢藩（前田藩）士山田丹治の長男として、金沢市上本田町に生まれた。明治一三年に父は寒業を志して来札、翌年家族とともに幸太郎も来札した。志して札幌農学校に進み、明治二七年に農学科を卒業した。



行啓記念植林用地に標木立つ（明治44年10月）



その間山田幸太郎は、新渡戸稻造から農学、植民学、英語等を学び、これを契機に、終生新渡戸稻造を指南としたのである。これについては、新渡戸稻造の後継者で、北海道史研究の第一人者であり、山田幸太郎から直接教えを受けた高倉新一郎は、校友会誌『水魂』の「ソクロウをかけた」の中で、「（上略）先生（山田幸太郎）は札幌農学校時代親しく新渡戸先生に習はれ、特に目をかけられたらしく、新渡戸先生に傾倒して居られた。新渡戸先生は人も知る博識な方で、その知識をもつて、平易にしかも新しく、世界人となつた日本人の踏み行く道を説かれた。山田校長の修身も実はこの新渡戸先生の感化だったのだなど知つた」と記述している。

山田幸太郎が教育の道を歩んだのは、新渡戸稻造の『穀を作るは一年の計、樹を植うるは十年の計、人を育つるは百年の計』のことによるといわれている。

山田幸太郎は札幌農学校卒業後、丸亀中学校、福岡伝習館を経て、大洲中学校から札幌に錦を飾ることとなつた。そして彼は、以後昭和一二年まで札幌中学校、のちの札幌第一中学校長として学校の經營に情熱を傾げ、高い評価を得た。北海道ではこの時期、「男子校の山田幸太郎」と、その令名をたたえたといふ。

日露戦争後に、開拓の遅れから起つた札幌中学校の騒ぎょうに際して、山田幸太郎は、部下教員の心をつかみ、生徒の気持を肌で感じ、みじんも高圧的態度をとらず師弟一体となつて事に当たり、校風を一変させたという。

校長としての山田幸太郎の学校経営は、人事を公平に、派閥をつくらず、人間関係がうまくいくよう心がけた。反面、実力があれば抜てきをしたので、在任中多くの校長を輩出した。このため部下教員は安んじて長年同校に職を奉じたという。

また、いうまでもなく山田幸太郎の学校経営は、人の和をモットーとしていた。その眞體は、校長室を埋めた万巻の書にあり、これを読破し、休日といえども机に向かいその心奥を究めた。

朝会をはじめ各種の集会には、ろうろうとしたさびのある声に生徒たちは感服し、しびれたのである。そして、学校を社会に処する修養の場としてどうえ指導に当たつた。

その一例として、遅刻する生徒があれば校長室に迎え、ときには人生を論じ聞かせる訓戒というより人間の生きざまをさとされるので、叱られるよりも身にこたえたという。

『よく学びよく遊ぶ』という古今東西の金言

柳政太郎普通學務局長が演説の際、日本の教育に関する講演の一資料としてこの写真を携帶し、紹介したことが「ロンドンタイムズ」に掲載されたのがきっかけで、世界的に一躍有名になった。また、昭和九年一月にはラジオによる全国放送で雪戦会の実況が放送された。当時、多くのほかの学校も始めた雪戦会が長く続かなかつたのに、この学校が伝統を守つてこられたのは、帰るところ生徒間の和があつたからで、それが当校の誇りである。

山田幸太郎の校長時代にあつた、台覽授業を校長として非常に喜び、これを記念して記念植樹を企画し、その地を豊平町有明（現、札幌市豊平区有明）に求め二百数十町歩にカラマツを植え、土地によつてはトドマツを植えた。この記念植林は今は亭々として空をおおい、全国有数の学校植林地になつてゐる。

この学校林こそ山田幸太郎の人生訓そのもので、今は林地内に「山田林道石碑」と、「造林育人」の山田幸太郎顕彰碑を建立し、その



第28回雪戦会北軍塗城（大正14年）

を信じ、学業に精励せしめる反面、積極的に著名な人を招いて講演をお願いする。また、

体育、スポーツを奨励した。その結果、いろいろな競技で全道はもちろん全国に覇を唱えいろいろが多かつた。

山田幸太郎の教育訓は、次の歌にうかがい知ることができる。

五どせのゆきを 学の庭につみ

春のひかりをあふぐけふかな

（『冰魂』から）

いしぶみによつて永遠にその初志を残そと  
している。

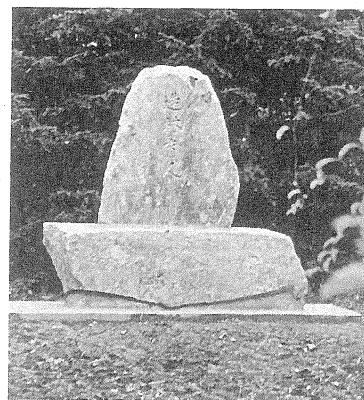
## 万人感化

山田幸太郎は若いころから吉田松陰の思想に傾倒し、佐藤一齋、本居宣長に心酔し、陶淵明の詩に感激した。また欧米の著名人に心をはせた。これがあらゆる場に、にじみ出していた。

この人徳をたたえるべく開校三八周年記念の昭和八年に、山田幸太郎勤続二十五年記念の胸像を建立した。これは退職四年前のことであつた。

札幌中学校時代の校舎は札幌の北部に位置したが、大正一一年に南部の現在地に新築移転した。その後、同校敷地南部に校舎を新築、現在（札幌南高等学校）に至つているが、その校門近くに山田幸太郎の胸像が建立され、登・下校する生徒を見守りほほえんでいる。この胸像は、戦時中供出され、昭和二五年に再铸造されたもので、くしくも除幕は山田幸太郎の死去する四年前のことであつた。

山田幸太郎は、昭和二九年八月二八日、八



「造林育人」山田幸太郎顕彰碑

# 女性の自立と“教育即生活”を説いた 柴田やすす



柴田学園創設者 柴田やすす

裁縫塾から短期大学開設までの苦闘と栄光の生涯を、開學式の壇上で閉じた学園の母

## 一 アザミの花

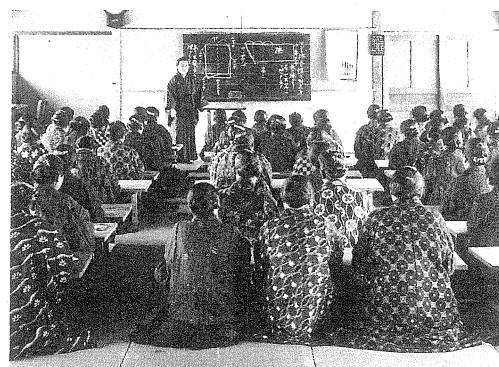
日露戦争の勝利で、首都東京が興奮に沸く明治三九年六月。神田橋の東京府家事科教員伝習所に通学する女性がいた。当時流行のエビ茶のハカマにヒサシ髪のスタイルは、一見、普通の女学生だが、実はこの柴田やすすは二十六歳で二児の母、わけがあつて青森市から来る上京していたのだった。

やすすは青森の商家の妻だが、夫が家業を怠けて将来の見込みが立たず悩んでいたところ、

弘前は三〇〇年の歴史と、教育文化の伝統をもち、明治中期に開校した県立女学校とそれより古い私立女学校が、女子教育の名門校であつた。どちらも普通教科に力をそそぎ、家事裁縫の実技指導は十分ではない。卒業しても花嫁修業のため、町の裁縫塾に通う有様であつた。

そこでやすすは、東京で修得した新しい洋裁技芸と教員の経験を生かして裁縫塾を開き、世間の要望にこたえようと、借家の軒先に和洋裁縫手芸教授の看板を出したのである。和洋・手芸というまだ新しい言葉にひかれて、すぐに一〇数名の塾生が集まり、やすすの目先のきいた試みは成功した。

やすすはいつも品のよい見だしなみで、苦労人だけに塾生をいたわり、自分で柴田式裁縫と呼んだ合理的な仕立て方を懇切に教えるので、娘たちの上達が早いことも町の評判になつた。数年後には借家住居から現在在柴田学園本部のある一画に独立し、将来の展望を図つたのである。



洋裁の授業風景（大正13年）

## 二 異色の裁縫塾

しかし、やすすは程なく娘家の事情と、残してきた二人の娘たちに心引かれて青森に帰った。小学校教員で再出発したが、四二年の青森大火で一家はり災し、また長女は一三歳での姿だったのである。

藩の御用を勤めた富商。明治維新の時に家産が傾き、一二代目の今村儀三郎は青森に移った。やすすは明治一四年、その長女として生まれたが、父は早死してやすすは再婚した母の許で育つた。

## 三 教育を生活に生かせ

やすすは日進月歩の東京での体験から、これからは地方の女性たちも時代の進歩にめざめ、本来の天分を生かしながら社会的にも自立できなければならぬ。そのためエリート教育

の機会に恵まれない多くの娘たちの教養知識

を高めてやることを、自分の仕事にしようと  
信念を固めた。

そのため塾生には修身、国語、算術、家事の科目から、習字、茶の湯、生花まで手ほどきをして、嫁入りまでに一通りの教養を身につけさせたのである。やすのこの方針に力強い協力を与えたのは、やすが『三山先生』とやまつた杉山・永山・高山の三氏で、みな教育経験と指導力に富んだ地元の名望家であった。

大正九年四月から、私立柴田和洋裁縫学校と改称し、校長として特色ある私学教育を進めた。開校の朝、やすは前庭の片隅にニワウルシの小さな芽を見つけ、「きょうからお前と一緒にのびていこう」と語りかけたという。やすのひたむきな努力が実って、三年目の大正一二年に各種学校として認可され、予科・本科・研究科合わせて一〇〇名定員の私立弘前和洋裁縫学校となつた。いまも柴田学園はこの時を創立記念の年としている。

晴れて公認された和洋校の志願者は定員を超えた。やすはかねての教育信念に基づき、実際生活に直結した家事裁縫の実技と勤労精神にこそ、女性の社会自立のかなめがあるとして、生活の中に教育を生かせ、『教育即生活』の目標を高く掲げた。これが現在も将来も動かぬ学園建学の精神である。

運動場も整備された。これに先立つて制定した校訓には、清淨心・品性向上・和顔愛語・親切・快活優雅・長幼の序・勤儉など、日々の訓育方針を明示している。

創立一〇周年に当たる八年には高等師範科が新設され、その卒業生には裁縫科中等教員免許状が無試験検定で与えられる東北・北海道有数の学校になり、地元の女子の向學心を高めることになつた。秋の校舎増築落成を兼ねた記念式典で、五三歳になつたやすは「一〇年一日のごとく子女の教育に当たり、全校あげて家庭的な和合を発露したことは、感慨胸にあふれ感涙にむせぶのみである」と、多くの山坡道を越えてきた心情を述べた。

弘前は軍都であつたため、戦時下には全校あげて留守家族への奉仕活動、軍の被服修理、食糧増産などに努めた。やすは『柴田式改良モンペ』で特許をとり、はきやすくスマートな婦人戦時服として、生徒にも一般の婦人たちにも広く愛用された。



グライダーの操縦かんを握る活動的な柴田校長（昭和17年ごろ）

## 六 短期大学開設

終戦の翌二年、やすは財團法人柴田学園を設立して理事長となり、新時代の方向に堅実な対応を進めた。この年東北女子専門学校（生活科・被服科）を開設し、まもなく六・

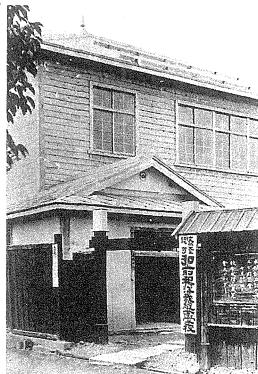
ばかりの発展である。また市内の旧軍隊の敷地と建造物を大蔵省から払い下げをうけ、今後も拡張の基盤も残している。

二四年には時代の要請をみて栄養士養成の

## 四 百難心動かず

やすの指導はきびしく、裁縫仕立ては少しの狂いも許さず、すぐハサミを入れてほどき、きつちりと要点を教えた。農村地帯からの生徒は学校に寄宿し、校長一家と家族同様の生活の中で、日常のしつけも自然と教えこまれ

た。そうした折りにくじけそうな心を支えてくれたのが『百難心動かず』の言葉だつた。昭和三年には実業学校による青森県最初の私立女子中等学校に昇格、裁縫塾から一五年で高等女学校と同格に認められたのである。



昭和5年の新校舎

## 五 施設内容の充実

やすは地域にあつては、時代にふさわしい家庭生活の見直しを呼びかけた。東京から講師を招いての洋裁や西洋料理の講習会は主婦たちに喜ばれた。市内の女学校にさきがけて

大正一四年からの『和洋のバザー』は、生徒の仕立物、手芸など七〇〇点も展示され、振袖掛けの花嫁衣裳、紋付重ねなど、裁縫の高度な実力は観客の目を見張らせるみごとなつた。誠実で気立てもよく、実技に強い卒業生を見て、嫁にもらうなら和洋校から、という世間の評価も高まつた。そして、隣県秋田地方からの入学者も、毎年ふえるようになつた。まだ寒さきびしいある年の春、生徒募集のため秋田北部に風邪の熱をおして出かけたやがて泊つた旅宿で、床の間の掛け軸が目につけ

た。三制が公布されるごとに柴田中学校・柴田女子高等学校を発足させ、中学から女専までの生徒一三〇〇名、教職員六三名の総合学園となつた。卒業生もすでに七五〇〇名を数え、驚く

講堂、作法室が後援会の援助で落成し、屋外

晴れの開学式は五月一四日、しかも「母の日」であった。講堂を埋めた教職員・生徒・関係者・来賓を前に、黒紋服の正装の胸に藍綬褒章と大輪の白バラを飾つて、感激の式辞

を述べていた学長柴田やすの姿が、にわかに壇上に崩れたとみたが、そのまま劇的な最期

努力と情熱が、長い苦闘の歳月のうちに、生涯の夢であつた大学を実現したのである。

この時やすの懐中には、たぶん祝賀の席で披露するはずの和歌二首があつた。その一首がいまやすの慈愛で大きく成長し、学園の前庭に茂るニワウルシの樹下に立つ歌碑に刻まれ、朝夕、人々に仰がれている。

大学を建てしるしにをとめどち  
励み学びて尽せ世のため  
安子

やすの遺業をついだ次女今村敏は  
四四年に東北女子大学（家政学部）  
を開學し、既設の諸学校と合わせて、  
さらに大規模な総合学園を完成した。  
(東北女子大学教授 森山泰太郎)

※一〇月号七八頁で「捧げた」の文字が間違つておりました。訂正し、おわび申し上げます。

いた。それは「百難心動かず、千辛氣益々振ふ」と書かれた文豪大町桂月の詩句であつた。

やすはこの言葉に励まされ、くじけてなるものかと勇気を奮い起ことしたと、のちにたびたび述懐している。

学校増築のため後援会の募金活動が始まり、やすも率先して事に当たつたが、時には売名者呼ばわりをされて悔し涙をのむこともあつた。

昭和三年には実業学校による青森県最初の私立女子中等学校に昇格、裁縫塾から一五年で高等女学校と同格に認められたのである。

# 教え子の慈父の「ごとく」

その生涯を中等教育のために

## 富田 小一郎



### 生い立ち

小一郎は、安政六年（一八五九）五月二二日、盛岡城下の加賀野で父哲母三ヨの二男として生まれた。父は藩主の御小姓や側目付を務めるなど二〇〇石を給されていた。

明治維新で時代が大きく変わったころ、一〇歳の小一郎は、藩校の作人館修文所へ入学し、主として数学と英語を習つた。

明治二年（一八六九）一一歳のとき、母が亡くなり、父は藩職を続けていたが、明治四年役職を辞した。このころ小一郎は、父の勧めで特別に横田龍郎先生宅へ出かけ、数学の三角法の初步の勉強を二年間続けている。

当時、戊辰戦争に敗れた南部藩の最大の課題は、教育による人材育成にあることを、小一郎は子どもながら強く感じていた。小一郎の教師になるきっかけは、このころにできたものであろう。



盛岡中学教師時代（前列中央富田、右端石川啄木）

### 向学心に燃え上級学校へ

小一郎一六歳の夏、東京で学業に励んでいた兄大二郎が亡くなつた。学資に窮し、アルバイトをしながら死んでしまつた。小一郎は医者にかかることができず若くして亡くなつたものであろう。

死にしないことだ」と。  
向学心の強い小一郎は、明治八年（一八七五）三月、盛岡を出て伊達氏の城下町仙台に設立された宮城英語学校に入学する。英語と

兄を思い、固く心に期するものがあつた。

「学問に一層精進して早く父母を安心させたい。同時に健康に注意し長生きしよう。兄の分まで長生きしなくてはならん、決して早

く死ぬ」と話すなど、一同若返つて時のたつのも忘れるほどだった。

数学を熱心に勉強した。翌年の春、小一郎の向学心はますます強く、文明開化の花開きしかも学資の得やすい東京で学ぶことを父に申し出で、旱速上京し、南部家四一代の利恭が創立した英語の予備校である共慣義塾に入学した。ところがこの直後の四月、父の急死に会い、東京での勉強は困難となつてしまつたのである。

再び仙台の学校に戻つた小一郎は、改称になつた県立仙台中学校を明治一〇年（一八七八）に卒業、直ちに上京し東京大学予備門に合格したが、学資が乏しく、大学入学は思えざるを得なかつた。

明治一〇年の暮、三菱商船学校（のちの東京高等商船学校）に入學し、子どものころ北上川で泳いだ体力と持ち前の気力でがんばつたが、しかし、小柄な小一郎は過労のため実習が不可能になり、やむなく退学、病氣快復のため帰郷する。明治一二年、はたちの暮である。

### 教師生活始まる

帰盛してまもなくの明治一三年（一八八〇）二月、小一郎は岩手県立師範学校の教師となつた。うれしい月給であつたが、小一郎が一家を支えるには苦しいものであつた。また、

### 日本一の謝恩会

時は昭和一四年（一九三九）六月三日。あらゆる謝恩会会場に当時日本一幸福な先生とよばれた富田小一郎がいた。そう呼ばれた理由は、教え子に米内光政海相、板垣征四郎陸相、及川吉志郎海軍大将、郷古潔三義重工専務、鹿島精一鹿島組社長、文学博士金田一京助はじめ、出測元駐米大使、田子衆議院議員、作家の野村胡堂らがいたことによる。東京でのこの謝恩会の出席者は、盛岡中学（現盛岡一高）の同窓生たちであつた。

富田小一郎を迎えて、一同は、一度にクラスの半分も落第させられた思い出や、石川啄木が「よく叱る師ありき、鬚の似たるより、山羊と名づけて口真似もししき」と詠んだ詩に花を咲かせていた。

八一歳の小一郎は、「私は中等学校教員をやつて足かけ五五年になるが、人に教えるといふ事は、なかなかうまくいかぬものだ。皆一〇〇点取るだろうと思つては半分以上は落第点だ」と話すなど、一同若返つて時のたつのも忘れるほどだった。

自分の数学の学力の低さも痛感していた。

小一郎は數年で師範学校の教師をやめ、宮城県農事講習所（のち農学校）教師として仙台へ赴任した。月給二〇円で、妻眉との新婚生活であった。

中原氏から「弟貞七が成立學舎を經營している。單身赴任なら生活も十分にでき、東京大學選科に入り勉強もできる」との手紙に、急きよ農学校教師をやめ、單身上京した。

明治一八年（一八八五）一月、小一郎は高  
せいりつ

新渡部鉢造、棚橋絢子、大隈（南部）英麿等も教師をしていた。生徒には太田達人、夏目漱石、田丸卓郎たちがいて全国から数百名が集まっていた。

小一郎はここで教えたながら、この年の九月東京大学法学部理財学科（経済学）へ撰科入学し、勉学に励み、明治二一年（一八八八）無事卒業した。三〇歳の秋であった。

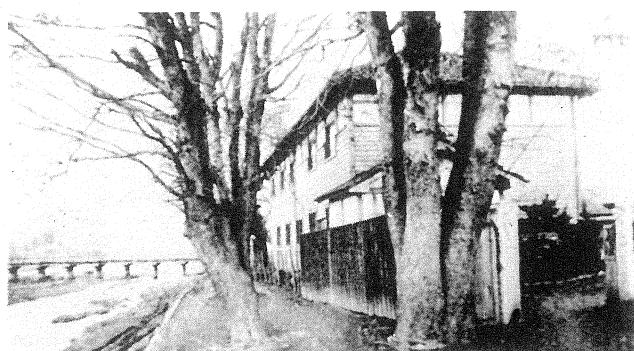
盛岡中学校教師時代

東大卒業後一年あまりして、小一郎は盛岡市の岩手県尋常中学校（のちの盛岡中学校）教師となつた。念願の数学を担当したが無資格だったため、明治二五年（一八九二）五月から一年間、検定試験勉強のため中学校へ勤めては、夜間商業高校の経営に当たつていた。こうして二年後、転勤を命ぜられたのを機会に青森第二中を退職し、盛岡へ戻ってきた。市立商業学校設立への決意を胸に秘めて帰盛岡に戻つた。このとき、小一郎四十五歳。

盛岡に戻つた小一郎は、三田俊次郎の作人館中学部に勤めながら、夜間商業学校にかかる市立商業学校設立へ市内有力者の賛同寄付をもつて市長へ働きかけた。ところが、意図した許可が得られず商業学校実現は水泡に帰してしまつた。さらに明治三九年（一九〇六）、自ら經營してきた夜間商業学校も廃校となつた。

しかし、小一郎は商業教育の必要性を考えなんとしても商業学校実現を図るべく、その名で作った三立丸で、四年半も漁業を展開したが、資金はたまらず事業は失敗に終わつた〇年（一九〇七）のことである。

親友の三田義正、齊藤源五郎と小一郎の三名で作つた三立丸で、四年半も漁業を展開したが、資金はたまらず事業は失敗に終わつた



### 中津河畔当時の盛岡女子商業学校

九一三)になり、念願の市立商業学校設立となつた。小一郎は、校長兼教諭として迎えられたのである。貧しい生徒には学費を援助したり、卒業生の就職あつせんも校長自らが行

商業学校校長として

七転び八起きのごとく、盛岡に戻つた小一郎は再び作人館中学部の教師となり、さらに

めながら、下村泰中和尚の報恩寺に合宿し、数学を一心に学び文検合格を達成した。この和尚との一年間の朝夕をともにしながらの生活が小一郎の生涯に大きな影響を与えていた。

陸海軍將官一四名、大金社社長十余名、その他教育者、石川啄木や野村胡堂等文士などがいた。小一郎は晩年「されど、小生は自分の方にて立身せしめたる自慢の教え子は、遺憾ながら一人もなしと自白せざるを得ず。故に教え子として申し述べるは、教え子にして教え子にあらずとも申すべし」とけん孫している。また試験が厳しかったことについては、「一度や二度の落第で開口するようでは、偉い者にはなれない」との信条から生まれたものであつたと述べられている。

## 市立盛岡商業学校設立への動き

まま、講師として兼務していたが、経営者が転任となり、この学校のあとを託されたのである。「なんどかやつていこう」小一郎は決心した。これが苦難の学校経営のはじまりとなつた。

独立校舎もなく、ランプ照明での授業で市からの補助金でやつと経営が成り立つっていたしかし、小一郎は校長兼教諭となり、実用的授業内容の充実に努めた。一方明治三四年的

（一九〇一）盛岡中学でストライキがあり 小  
う奮闘ぶりであつた。  
しかし六一歳になつた大正八年（一九一  
九）、節約論の訓辞が誤解を招き商業学校を去  
らざるを得なかつた。翌年岩手県立農学校教  
師となつた小一郎は同年 私立盛岡実践女学  
校を創立し、校長として、女性の職業人どし

自立して生きる力を養うことになつた。盛岡実践女学校は、この後、幾たびかの校地の変遷を重ねながら、校名を盛岡女子商業学校（大正九）、盛岡市立女子商業学校（昭和一五）戦後の学制改革を経て現在の盛岡市立高等学校となつたのである。

富田小一郎は、人づくりのため常に中等教育の先頭に立つて実践する行動的教育者であつた。人づくりは『情熱にあり』を示した人でもある。晩年は女子教育の父ともいわれ、昭和二〇年八七歳の生涯を閉じるまで、女子商業の校長であつた。岩手育英会の創設者でもあつた富田小一郎。その生涯は、教育愛と不屈の精神あふれるたくましい道程であつた。

## 【参考文献】

堀内正己『教育の父富田小一郎』  
富田雄二『不屈の人富田小一郎』  
盛岡市立高校五十年記念誌

( 岩手県立盛岡第一高校図書館報第38号 )

# 郷土に生きて 国語教育の歴史的潮流をつくつた 北方の父

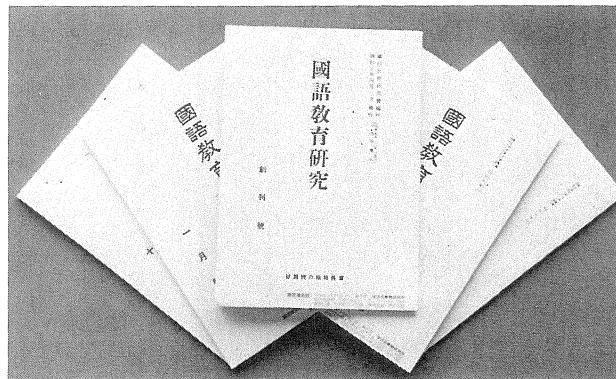
A black and white portrait photograph of a man from the chest up. He has dark hair and is wearing round-rimmed glasses. He is dressed in a dark suit jacket over a white collared shirt and a dark tie. The background is slightly blurred, showing what appears to be an interior room with vertical elements.

卷之三

れて賞揚されるべきと思うのである。

自らも一つの源流となり、新しい潮流をはぐくんだ菊池譲。彼の国語教育への道程もまたドラマチックである。

（現高校）に入学したが中退。母と父の続いた死、加えて彼自身の病弱のためだった。その後三年を、石巻——名古屋——東京と治療闘病のまわる放浪生活だった。こうした孤独な青春時代を経て、月俸八円也の代用教員となりたのは大正二年も一〇月だった。このころすでに国語教育研究家への萌芽をあらわし、童話の研究に熱中、「童話の教育的価値」の論文を草して河北新報に投じ、三回にわたって掲載された。大正七年尋常科正教員の免許状を受けて、小学校教員としてつ舌懽に入つた。



昭和7年に創刊された教育誌「国語教育研究」

渦巻く新思潮の中で

大正から昭和の初期は、日本の教育の夜明けのときだといわれる。国語教育もまたその例外ではなかつた。多彩に湧きこる主張、高潮する言論、けんらんたる実践の諸相など、あふれるばかりの活力を呈していた。

は新しいときであつたことは、諸文献を見る  
とおりである。すなわち、大正デモクラシー  
に象徴される自由主義、児童中心主義、文芸  
（小説、詩歌、音楽）の用ひで「豊かさ」

はいとして起こっていたときもある。  
國語教育においても文芸主義的な主張が一時本流の感があつたが、これへの批判として

形象理論の論議がたたかわされ、それが解釈学に至つて最高潮を示していた。かくのごとくゆれ動き、燃え上がる論争の中で、遠く地方の声をあげて堂々の主張を張り、実践を進め、若き同志を温かく指導育成していつた名リーダーこそ、菊也讓その人であつた。

中央依存、中央志向の強いときがあつて、徹底して地方教育に根を下ろし、「村の読み方教育論」を全国的に普及、やがては生活主義生活綴方、北方性教育へと進展する歴史的潮流の源をつくったその教育業績は後世に繼が

添えて いる言葉が印象的である。すなはち、大正七年一月、尋常科正教員の免許状を受く。——この時から教壇に一生を託せんと決す。

大正八年一月、真野小学校訓導揮命——このころ八大教育思潮の一つ、及川平治氏の「分団式動的教育法」に傾倒す。

氏の「自由教育」に興味を持ち、千葉県師範学校附属小学校を視察見学——ここで自己の無学を痛感。ひそかに決意して、一日百ページ主義を誓い、がむしゃらに本をかじる。ど

思えば、後年国語教育研究実践家の若者たちを率いて、哲学論に、文艺論に、国語教育論にと、深遠な言論をもつて万丈の気を吐く素地は、この間における自己研修によって培われたものと思われる。

大正一〇年六月、宮城県初等教育研究会において、「読書力の養成を主眼としたる読み方教授」を発表し、ここに国語教育に慧眼を持つ青年教師ありと県下の注目を浴びるに至つた。彼の若干二七歳の時であつた。

大正一二年、若柳小学校より宮城女子師範附属小学校に抜擢され、このときから、県下小学校国語教育のリーダーとしての道のりが始まった。正規の免許状を持たぬ彼の登用は県下教育界の注目するものであつた。彼の卓越した才質がしからしめたのはもちろんだが

山内勝治郎氏と採用を決したときの女子師範付属小学校主事二階堂清壽氏（後、日本女子短期大学長）の見識と勇断を物語るものとして、いまなお爽快な語り伝えどなつている。

昭和三年、小学校本科正教員の免許状取得。附属小学校に着任して二年目であった。このころ彼はもう押しも押されもせぬ国語教育指導者として充実した地歩を示していた。翌昭和四年には「国語読本の学び方」全六冊を完成。県下各地から招かれて、指導授業に、研究会に講習にと席暖まる暇もない東奔西走ぶりであった。

昭和七年四月、宮城の国語教育向上に寄与せんことを期し、同志と団つて、教育研究誌「国語教育研究」を刊行。同年一二月には同誌の主張に基づく第一回の国語講習会を開催。講師に、丸山林平、三沢謙治郎、千葉春雄の三氏を招き、県下国語教育に新しい灯を点じたのである。

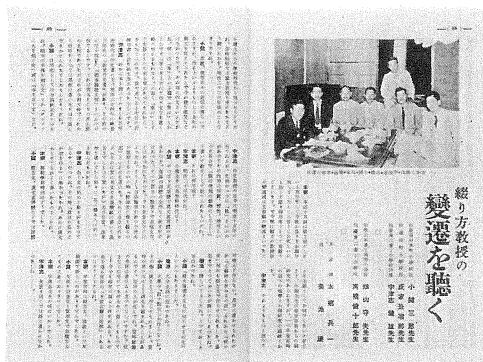
### 「国語教育研究」の菊池譲

菊池譲が兄事し敬愛して親交した千葉春雄が東京高等師範附属小学校から転じて厚生閣にあり教育誌「教育・国語教育」を創刊したのは昭和四年、菊池譲が相呼応するかのように地方にあり仙台の地に「国語教育研究」を創刊したのは昭和七年。中央と地方で、ほぼ彼は次のように記録する。

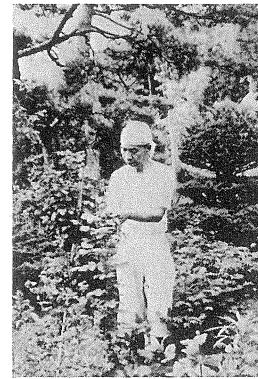
昭和一三年四月、時局に鑑み「国語教育研究」を休刊す。創刊以来六巻、全二四冊を世に送り、県下並びに北日本に、多少の貢献をなし得たりと、自負するものなり」と。簡潔に語る中に、信念に生き自信に満ちた活動の終止を告げる淡淡たる心境が言外の言をさそつて胸をうつものがある。

### 種子をまく人として

菊池譲が「国語教育研究」によつて立つたとき、彼を慕う若い情熱家の教師たちが、統々どその傘下に集まつた。彼の主張に感銘し、彼の言論に感激し、彼の人間的魅力にひかれのであつたろう。めんどう見のよい彼は、だれをも友のごとく迎えて、誇々と熱意をこめて所信を説き、温かく抱えて、多くの人材を育てた。彼はもども温情家で几帳面、信



「国語教育研究」の内容の一部



ある日の菊池譲

「国語教育研究」の最も中核となる考えは、彼が日ごろ実践している「地に即き、児に即き、われらの目でみ、われらの手で當まるべき国語教育」の提唱である。この提言は一見平凡單純なる主張のようであるが、当時の社会情勢では、地方教育は一様に中央依存に傾き、中央志向は当然としたものだつた。このような情勢にもかかわらず、地域の現実に立つて子ども們の生活に即した教育の提唱は、明確に主体性を持ちつけた教育実践の主張であつたことに目を見張るべきものがある。そもそも菊池譲の国語教育論は、解釈学に基盤をおく理論で、具体的実践を地域（生活の場）と児童の現実重視の上に展開しようとする主張で、日ごろ彼が掲げる「村の読み方教育論」そのものであつた。

彼の主張する見解は、農山漁村の教師たちに共感を呼び、高い説得力となつて伝播した。県内はもとより東北・北海道まで広がる共鳴を集め、若い情熱をもつた教師群が彼の主張に参加した。誠実、温情家であつた彼は友人、同志として温かく親身になつてめんどうを見た。かくして、「国語教育研究」により、彼についてはぐくまれた人は、やがて彼等自らが

念に燃える情熱家でもあつた。また、物事を決して中途で投げ出さない東北人特有の美質をも備えていた。こうした人徳に抱擁された指導を受けた人々が、宮城の地はもとより東北、北海道に広がり、やがて戦後の教育界に、国語教育のみならず、新教育のリーダーとして、大空の星のごとくに輝いた。まさに彼の投じた種子が美果を結んだといつてよい。彼が「北方の父」として敬慕されるゆえんは種子まく人への尊称にはかならない。

菊池譲の教員生活は、附属小学校勤務の華やかなときがあつたとしても、教育者としては必ずしも世俗的に恵まれたとは言われまい。彼は一〇数年にわたる小学校長歴を持ちながらそのすべてが草深い農山村であつた。わが國の国語教育の一つの源流を作りながらも、あえて主流からそれるがごとく「村の読み方教育」に徹し新しい潮流をはぐくんだ人として長く歴史の中で回想されるだろう。

種子まく人はいつの世も孤高な生涯を生きるものらしい。彼の晩年晴耕雨読の生き方にその影を見る。

昭和四五五年四月遂に逝く。

【参考文献】

「国語教育研究」(全) すばる教育研究所(復刻版)  
「宮城県百科事典」河北新報社  
「北方の父」すばる教育研究所(復刻版)

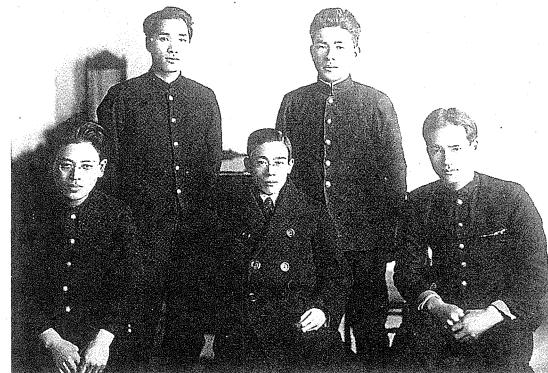
(財) 宮城教育振興会評議員  
（社）仙台ユネスコ協会理事 村田幸造

# 秋田県の音楽教育の礎を築く 小野の崎晋三



## 音楽の道への強い志

小野崎晋三は、明治三六年三月二日、現在の秋田県河辺郡雄和町川添字下黒瀬で六人兄弟の長男として生まれた。晋三の父は、鞍負といい、下黒瀬小学校の校長を長年勤め、校務のかたわら地域の青年教育などにも尽力し、信望厚い人物であった。



東京音楽学校当時の晋三（前列左端）

## 本格的な音楽教育活動の開始

昭和二年東京音楽学校甲種師範科を卒業し、岩手師範学校教諭兼訓導として就職することが決定した。ところが、同年、父鞍負の突然の死によって、晋三が一家を支えなければならなくなつた。三年後の昭和五年三月、ちょうど学級増となつた秋田県立本荘高等女学校の音楽科教員に任用された。ここから本県における音楽教育活動が展開されることになる。

赴任して間もなく、由利郡音楽研究会を結成して副会長となり、音楽教育の普及と指導に着手した。またこの年、県音楽教育協会と教員合唱団を結成したとも伝えられる。このころの晋三は、當時さかんであつた童謡の作曲に深い関心を抱いていたようだ。私家版『小夜樂』には多くの自作童謡が掲載されている。

翌六年七月、秋田県師範学校教諭に迎えられ、活動の舞台は全県へと広がつた。

この年の秋、師範学校に吹奏楽団を結成した。もつともこれは昭和八年からやつと小編成ながら演奏活動ができる規模だったようである。同七年には、東北地方で初めて、教員の有志による秋田県教育音楽協会を組織し、各都市に支部を結成するとともに、中央から講師を招いて音楽講習会を開き、普及につとめている。また、昭和八、九年のころから母校東京音楽学校の学生を招いて演奏指導を積極的に受けたと伝えられる。そして、同一三

許可され、熱い心を抱き上京した。

大正一三年、晴れて東京音楽学校へ入学を

年には小中学校教員による秋田県音楽教育研究会を創設し、晋三が初代会長に就いた。以後二六年間その代表を務めた。

一方、秋田市内の学校の教員をもつて混声合唱団を組織し、NHK秋田放送局から毎週一回合唱を放送したり、晋三を会長とする秋田県吹奏楽連盟を結成するなど、各種の県内音楽組織づくりを着実に進めた。

昭和一年、秋田県は文部省から総合郷土研究に基く郷土教育の指定を受け、秋田師範学校が中心となって研究を進めた。晋三は「郷土芸術」の分野を担当し、県内の舞踊・民謡についてまとめた。このときの経験が、秋田の風土と文化についての理解を促す基礎となり、のちの音楽活動に大きな影響を与えている。

当時昭和四年から同一〇年までの昭和恐慌期の日本経済は、かつてない状態であった。さらに軍国主義的風潮が進み、華麗な調べよりも軍楽調が求められ、心のゆどりもなくなるなかで、本県の音楽教育を守り、それを実践していったことは高く評価される。

### 戦後の音楽教育組織の充実

戦後、晋三をはじめ音楽を愛好する人々は、直ちに音楽教育活動を再開した。いち早く全县吹奏楽連盟、秋田県作曲家協会を結成するなども、第一回秋田管弦楽演奏会、同県合唱祭開催など、本県音楽教育史にのこる事業を企画し、主導していった。

晋三の存在を内外に知らせ、これまでの音楽教育の成果を全国に問うた総決算は、昭和三六年の第一回国民体育大会秋田大会における音楽演奏班長としての活躍と、昭和三八年の第一〇回音楽教育研究会全国大会の秋田大会での成果である。

國体の開会式では、県内の高校生と市内中学生合同による六五〇人という大編成の吹奏楽団の陣頭指揮を執り、全国に秋田県の吹奏樂の成長の成果を示すことができた。そして、これがその後の國体のモデルともなったといわれている。「國体を契機として、音楽文化は一〇年の進歩をみた」と称しても過言ではない。自身が総括しているように、この國体が秋田県吹奏楽レベルの向上の契機となり、今日の吹奏樂全国コンクールでの上位入賞の基盤となつていていることはいうまでもない。

また、音楽教育研究会全国大会では、晋三自身が大会賛歌として、本県出身の作曲家成田為三の「浜辺の歌」を混声四部合唱に編曲したのをはじめとして、本県の音楽教育の成果を問い合わせ、全国にその水準の高さと層の厚さを強く印象づけた。

### 今に生きる

県の音楽教育界のいわば頂点に立ち、指導した功績を認められ、昭和二九年には秋田県教育功労賞、同三二年秋田県文化功労賞を受



秋田大学学芸学部創立85周年記念演奏会で指揮をとる晋三



昭和38年7月の第10回全国音楽教育研究会の開会式終了後会場入り口にて  
(右から三人目)

晩年の昭和四三年、「河北新報」に「音楽と共に四十七年」と題して一文を寄せている。そのなかで吹奏楽、合唱界、秋田県合唱連盟、管弦楽、短大新設音楽科に分けて回顧していくが、微細にたどれば各組織の名称上の変遷はあるものの、戦後創設された本県音楽教育界の組織や事業で晋三の手にかかるものはないといつてよい。

晋三の練習の厳しさは有名で徹底したものであつた。「音楽教育の中にも、心魂を／芸魂をきたえよ」とは、晋三が常に口にしたことばであった。師範学校では剣道の選手として活躍し、剛健な秋田県人らしく、かつ戦時中でもダンディな服装を崩さなかつたという晋三には、音楽の道に邁進しても一種の峻厳さがあつた。

また、晋三の後継者作りはつとに有名である。例えば、秋田県では最も古い歴史をもつ混声合唱団「カンパネラコール」は、クリスマスのキャロルを歌うため、占領軍軍政部からの命令により結成された。団員は市内の学

校の音楽部から選抜し、この指導には小野崎晋三が当たつた。その後より後継者、今はなき木内博を得て、公務員・会社員など広く市民も参加し、定期演奏会の開催、各種芸術祭への参加等を通じて秋田県の音楽水準を高めることも、それらの活動を通じて後継者を養成に育てて今日にいたっている。

晋三は、音楽教育組織の確立と普及の仕事をともに、全県の小学校・中学校・高等学校の校歌をはじめとして、園歌・団体歌など、数多くの作曲を残し、広く愛謡されている。昭和二四年母の日制定記念に募集した歌詞「いいかあちゃん」、歌曲「桐の花」、合唱曲「秋田民謡連歌、生保内節・ひでこ節」など郷土のよさを引き出した作品がよく知られている。

また、五人の子どもたち三人が音楽家となり、現在日本の音楽界の第一線で活躍している。

生涯音楽人として生き抜いた晋三の強い意志が受け継がれ、そこに生きているように思われる。

(秋田県教育委員会文化課芸事務官 高橋 稔)

# 信念と実行の教育者 千 喜 良 英 之 助

千喜良英之助は、昭和の戦前・戦中・戦後の激動期を通じ、不屈の精神をもつて、数々のすぐれた教育実践を残した偉大な教育者である。



盛岡を去り、沖縄へ行く直前の千喜良英之助（昭和7年9月頃）

英之助少年の生活

千喜良英之助は明治二九年九月一五日、山形県南置賜郡南原村大字芳泉町（現、米沢市大字芳泉町）に七人兄弟の二男として生まれた。父は小学校教員であつたが、給料だけで大家族の一家を養うのは容易でなく、養蚕や畑作の副業も嘗み生計を立てていた。小学生の英之助は学校から帰るとすぐ畑に出かけ、桑摘みや野菜栽培の手伝いに精を出した。

設置、教職員の総意を学校經營に反映させる  
ことをねらいとしての会議制委員会の組織化  
等々である。

倅監に命じられた千良は、生活即教育の見地から寄宿舎の大改修を断行した。生徒の手による水泳プールの建設、農場の整備、精米機・洗濯機の導入、喫茶店、売店の設置などを行つて、実行に移していく。若い教師

徒六〇〇名の厚い信望を得た。

間に、「ほんどの者が一千喜良先生」と答え、たとの報告を受けた教育行政首脳部は、県知

岩手・沖縄での教育実践

このことを知った六〇〇名の生徒全員は、知事や文部省あてに留任陳情書を提出し、留

任運動を続けた。千喜良は生徒たちのこうした行動を抑え、代表を呼んで諄々と諭し、あ

くまでも軽拳を戒め、涙にむせぶ生徒たちに見送られながら沖縄へ旅立つた。

東京高等師範学校での生活

昭和七年九月三〇日付で沖縄県女子師範学校教諭兼舍監となり、その後、同一〇年五月に

沖縄県立第二高等女学校長に任じられた。翌

一年四月に第二高女が焼失したため、千喜良は校舎の復旧に全力を注ぎ、見事に校舎を再建している。沖縄にあっても、相変わらず嚴格ではあるが同情心の厚い千喜良は、健康を害し、本土への修学旅行を取り止めた三人の生徒のため、その年の夏休みを利用して自ら引率し、生徒の念願をかなえてやっている。

## ふるさと米沢に帰つての教育実践

母校の中学校長としての教育実践 昭和六年五月に郷里の米沢から懇願され、母校の県立米沢興譲館中学校長兼米沢夜間中学校長として勤務することになった。

母校の中学校長となつた千喜良は、郷土の米沢藩主上杉鷹山が細井平州を藩校興譲館に招聘したように、すぐれた教育はすぐれた教師によって生まれるとの信念を実行に移し、自ら高等文官試験の合格者や若い学究など、優秀な人材を教師として集めるのに腐心した。彼はそのために生家の田畠を売却してその資金に当てる。千喜良の苦労を知った妻栄（日本民法学界の権威、文化勲章受賞者）はじめとする先輩や同級生は、「千喜良校長後援会」をつくり、賛同者数十名が一人年一〇〇円ずつ拠出し、用途は校長の自由に任すとし、校長を感激させた。千喜良は、その淨財

う深い思慮とともに、何よりも学校現場を重視する姿勢が背景にあつたのである。

また、県予算から四〇〇万円を割いて、小・中学校の教員給を全國第三位にまで引き上げたことや市・町立女学校の県立移管、社会教育課の設置、教育行政の民主的な機構と適材の配置など多くの教育上の諸課題に熱意をもつて取り組んだことは高く評価されている。

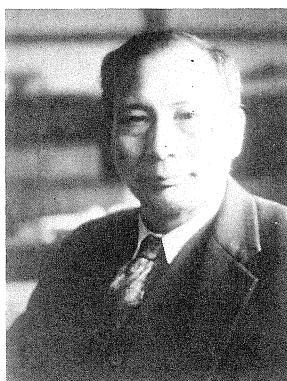
米沢女子短大創立への尽力 昭和二二年四

月に、再度米沢興譲館中学校長となり、更に昭和二七年四月に米沢東高等学校長を兼務した。千喜良は、地方の生徒に広い視野を持たせるには、一流のものに触れさせる必要があると考え、乏しい学校予算を割き、毎年必ず第一級の学者や芸術家を学校に招き、講演会や演奏会を開き、生徒たちをしてその香気に触れさせた。

更に、千喜良はこれから時代には、女子の高等教育機関を設置することが郷土の発展にとって是非必要との考え方から、現在の県立米沢女子短期大学の設立のため、陣頭指揮を取つて準備に奔走した。当初、県立としての申請が困難な状況にあつたため、米沢市立の方針を変えなければならなかつたが、市議会において、千喜良は高邁な理想に基づき、諄々どその設立の意義を説いた。千喜良の信念が



東京高等師範時代前列右から2人目



晩年の千喜良英之助

を、すぐれた人材の養成と自由闊達の氣風を旨とする学校経営に惜しみなく使つた。この後援会は、千喜良が昭和二十年三月に召集を受けるまで継続された。

### 戦後教育問題の処理

終戦を迎えて、郷里に復員してきた千喜良は、昭和二一年四月に山形県視学官兼学務課長として、アメリカ軍政部の指示をうけながら、戦後の教育問題の處理に渾身の努力を払うことになる。

解決すべき問題が山積した中で、千喜良学務課長が勇断をもつて対処したものに、教員の適格審査の問題があつた。教職員の中から軍國主義者と極端な國家主義者を排除するため、昭和二一年四月に勅令により教職員適格審査委員会が設けられ、千喜良学務課長が実務を担当した。そこで彼は審査の結果を「不適格者なし」と報告した。この報告を受けた軍政部はそのことに強い不審を抱いた。千喜良は不適格者がいない理由として、該当者は既に審査委員会発足前に自発的に退職している旨を報告し、容易に納得しない軍政部の説得につとめ、報告どおりの決着をみた。山形県の教職員追放が全国最低にとどまつたのは、千喜良をはじめとする当時の県教育行政首脳部の、戦争責任は、特定個人をスケープゴトにするところで回避できるものではないとい

議員の共鳴を呼び、米沢市は女子短大の設置に踏み切つた。初代学長に就任した千喜良は附属生活文化研究所を設置するなど、その内容充実に努力した。今日、本県の数少ない高等教育機関の一つとして、多くの人材を輩出している米沢女子短大の礎はこのようにして千喜良によつて築かれたのである。

昭和二九年に学長を退き、三一年九月に米沢興譲館高校長を退職したあと、県教育委員に選ばれ、八年の間、県教育行政に尽力した。三九年三月に県教育委員を辞任し、翌四〇年八月、六九歳の生涯を閉じた。

千喜良は生涯にわたつてあらゆる人を愛した。特に得意な才能を持つ人材ほど愛した。そして、正論には常に耳を傾けた眞の人道主義者であり、眞の教育者であつた。

（山形県教育センター所長 曹根伸良）



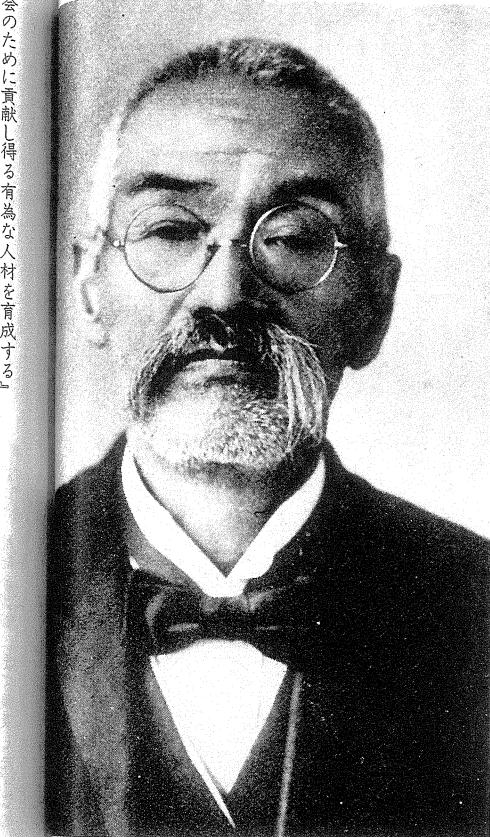
# 「行学一如」 愛と自由の中で人材の育成を 学法石川高校生みの親

森 もり

嘉 よし

種 たね

## 私立石川義塾を創立



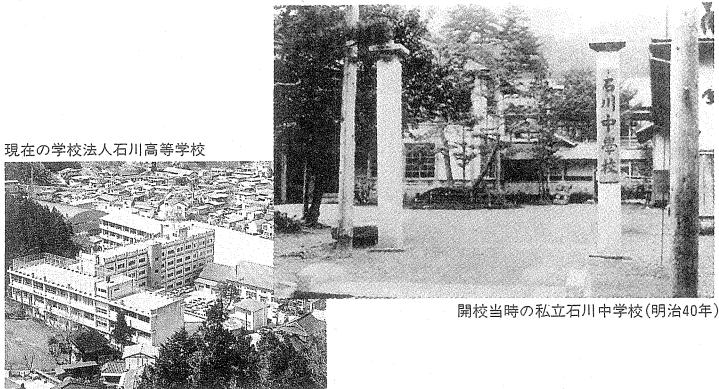
会のために貢献し得る有為な人材を育成する」とし、これが建学の精神とされている。

碑面に刻まれた「行学一如」の題字は正三位勲二等文部大臣河原田稼吉書。撰文は正三位勲二等文學博士塙谷溫、書は正四位勲三等森田実である。

撰は旧漢字の格調高い漢文で、大意は次のとおり、創立者森の主な業績、人間像などが明らかにされている。

國家興隆の幸は学校にあり。育英の任重かつ大なりと謂うべし。石川中学校長森小峯の功徳のごとき、記してこれを伝えるべけんや。小峯諱は嘉種。森氏世々白河藩主阿部侯に仕う。父嘉会儒を棄とす。兼ねて軍学に通ず。君その長子なり。文久二年十二月二十三日生まれる。阿部侯棚倉に転封せらる。君の家徒つて移る。戊辰の役、棚倉兵火に罹る。一家大いに苦しむ。君幼にして庭訓を受け、長じて水府に遊ぶ。業成る。職を小学校に奉じ傍ら洋学を修む。研鑽怠らず、中等教員の検定に合格すること五科目の多きに至る。明治二十三年、石川高等小学校訓導に任せらる。その地僻遠にして文教あまねからざるを慨き徒を集め、帷を下し石川義塾を創設す。刻苦經營、つぶさに辛酸をなめ、規模を拡張し、鏡意改善す。四十年四月、文部省の認可を得て私立

現在の学校法人石川高等学校



開校当時の私立石川中学校(明治40年)

石川中学校となす。獨創的の恩を受け子弟振々として学に向う。創立以来四十八年、卒業生三千、在校生五百人。これ固より聖代の幸運によるといえども君の率先唱導、百折不撓、終始一貫の力にあらずして何ぞ能く比に至らんや。君また石川郷産世界稀有の鉱石を見て自ら地質鉱物学を修む。発愤研鑽し、よくぞ知識を究め、書を著し、世界の學界に紹介す。その功また偉なり。

昭和三年、今上即位の大典を挙ぐ。君多年育英に従事し、力を学界に尽くすの功著しきをもって特に藍綬褒章を賜う。学徒の光榮何ぞこれに過ぎん。君資性温厚にして身を持すること謹嚴、母に任えて至孝、人を教えて倦まず、偏々として善に誘う。過ちあらばかりやめにせず、悔悟に至りて已む。故に生徒その威を震れ、その恩を懷う。君既に詩文に長じ、兼ねて書を能くす。頗る飲を解し、醉えばずなわち朗々と吟誦す。忠孝の大節に至ることに慷慨淋漓、声波ともに下る。古武士の風ありという。八年九月四日没す。享年七十二。五男三女あり。長子深造嗣ぐ。理学を修む。現に石川中学校長なり。近ごろ郷人追慕して已まず。石を建ててもつて君の名を不朽にせんと欲し、來たりて文を余に譲う。余君を中学校長會議に識る。辞退すべからず、すなわち状に據り梗概を叙し、擊つに銘を以てす。

学校法人石川高等学校（森 功校長・福島県石川郡石川町字大室五〇二）の校門に入るすぐ左手に高さ二メートルの「森小峯紀徳の碑」がある。同校の前身私立石川義塾、石川中学の創立者森嘉種の功績をたたえるもので七回忌に当たる昭和一四年九月四日、教え子たちによつて建立された。

石川義塾は、明治二五年（一八九二）六月五日、私学では県内最初に創立された。教育の方針は『愛と自由の雰囲気の中で「行学一如」の生活態度を身につけさせ、将来國家社



# 不屈の心でひたすらに生く 日本の保母第一号

## 豊田英子

悲運を越えて



豊田英子

維新政府は成立したものの、いまだ戊辰の戦雲漂う明治元年（一八六八）の暮、水戸城下の夜陰のお堀端を、懷劍を胸に漢学塾に通う若い婦人があつた。夫小太郎の遺言「心を鬼にしておれ」（不屈の心を持て）を支えに、ひたすら勉学にいそしむ豊田英子二四歳の姿であつた。

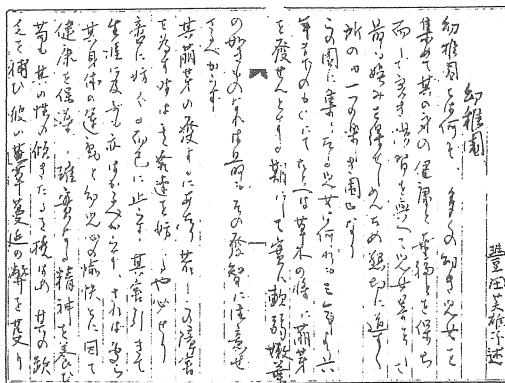
英子は、初め冬子と称し、弘化二年（一八四五）一二月二一日水戸藩士桑原信毅の次女として誕生した（嘉永四年の記事もある）。実父信毅は、兵学・国学に通じていた。生母雪子も書を能くし、和歌にも通じていた。雪子の父藤田幽谷は彰考館総裁を務め、兄の

### 保母第一号に

世の中に落ち着きの見えてきた明治三年（一八七〇）、英子は近所の子どもたちに読書を教え始めた。明治六年には、水戸に全国初の女学校である「発樸女学校」が開設され、英子はその教師に迎えられた。校名は、伯父東湖の「正氣の歌」の「發いては万朶の桜となり」からの命名であり、新時代の女子教育に対する決意にかなつたものでもあつた。

明治八年に東京女子師範学校が開設され、校長中村敬宇（『西國立志篇』の翻訳、ドイツ人フレーベルの幼稚園教育に共鳴）は英子を招いた。この敬宇との出会いには、豊田家に仕えていた敬宇の門下生である根本正（後の代議士）の仲介があつたが、これが英子を更に飛躍させることとなつた。明治九年、敬宇は同校に附属幼稚園を併設し、その保母専務に英子を登用したのである。日本の保母第一号の誕生であつた。

主任保母にはドイツ人松野クララが就任し、英子は松野からフレーベル保育法の理論と実践とを学んだ。開設当初の苦労に加えて、園児の家人との応対は大変なものであつた。大多数が高位高官の子弟であつたから、ちょっとした傷でも大騒ぎとなつた。これに対して、英子は辛め、ひたすら勉学に励むこととなつた。



豊田東湖は藩主徳川齊昭（烈公）の側近として高名であった。勉学には恵まれた環境にあった。

豊田英子著『保育の栄』

しかし、この幸福は長くは続かず、安政二年（一八五五）伯父東湖が震災で倒れ、同三年には母が、更に五年後には父も失つた。冬子一七歳の時であつた。

文久二年（一八六三）、冬子は豊田小太郎に嫁いだ。義父の豊田天功は藤田幽谷門下生で彰考館総裁を務め、夫小太郎も漢学・蘭学を学び、開国進取の意気に入っていた。

このころ、冬子は徳川齊昭の「景山女誠」を書きし婦人の道と胎教の大切さを学び、家庭第一を心がけようとしたが、それは許されなかつた。慶應二年（一八六六）九月、京都にいた夫小太郎は攘夷派によつて暗殺されてしまつたのである。

二二歳で未亡人となつた冬子は、生涯を亡夫の遺忘の拡充に捧げようと決意し、義弟の子の伴を養子とした後、名を「英子」と改め、ひたすら勉学に励むこととなつた。

開設当初の苦労に加えて、園児の家人との応対は大変なものであつた。大多数が高位高官の子弟であつたから、ちょっとした傷でも大騒ぎとなつた。これに対しても、英子は辛抱強く誠意をもつて臨んだ。

## 鹿児島へ赴く

明治一〇年（一八七七）の西南の役は、鹿児島の人心を荒廃させた。県令岩村通俊は、復興の基礎は幼児教育からとして、幼稚園の設立を決意した。依頼を受けた文部省は、英雄子にその大役を命じた。

鹿児島は、伯父藤田東湖に心酔していた西郷隆盛の生地であり、実兄桑原力太郎が西南戦役で戦死した地でもあった。英雄子は「拝神の辞」を作り、神の御加護を祈りつつ赴任した。土地では、藤田東湖の姫ということが道行く人を立ち止まらせ、あのエ・ライ・女先生と評判になつた。

大きな使命を果たし終えた英雄子は、明治一三年五月退任に当たつて岩村県令に対し、幼稚教育で肝要なことは、外面に拘泥することなく、真の性質を十分に伸ばし、想像力を広げさせることを、常の目標としておくことである。

建白し、そのますますの発展を願つた。

薰陶を受けた保母の一人龜尾は、

いまよりはおさなき子らが泣くこゑにいくたび君をおもひ出らむとの和歌を贈り、その別れを惜しんだ。

## 幼稚園とは何か

フレーベルの思想に、自らの体験に基づく

許された英雄子は、文部省から「歐州女子教育事情取調べ」の任務を委嘱された。

在欧三年のうち、英雄子はローマを中心にしてイギリス・フランス・スイス等を巡り、女子教育の実態を観察した。ローマ法王への謁見やカーニバルへの感激にもまして、初めて見る女学校の寄宿制度への感動は大きかつた。

帰朝した英雄子は、明治二七年この寄宿制度を取り入れた女学校「翌芳学舎」を東京に開設した。



豊田小太郎・英雄子の墓 水戸市常磐共有墓地



「家鳩」の遊戯 正面右端の教師が豊田英雄子

## ヨーロッパ視察

明治二〇年（一八八七）、旧水戸藩当主徳川篤敬の駐イタリア公使赴任に当たり、随行をであった。心血を注いだ同校の勤務は、二一年に及んだ。その間、明治三六年には女子師範学校（現茨城大学）が開設され、その教諭ともなつて女子教員の養成にも当たつた。

昭和二年、八歳となつた英雄子は、水戸大成女学校の校長を最後に公職を退いたが、八〇歳を迎えた大正一三年（一九二四）、それまでの功績に対して従五位を贈られた時、鉢とりで謹りし城も大御代の

めぐみは文の林にぞなると詠んでいる。長い教員生活に、無限の感謝と感謝をこめた英雄子は、風雲急を告げる昭和一六年一二月一日、九七歳をもつて永眠した。

不屈の信念と広く深い学問、柔軟な想像力と爽快な精神などをもつて、日本の教育界を感化していつた偉大な女教師豊田英雄子は、一方では看護学は六九歳、華道は七八歳で免許を受けるなど、自らも生涯学習を実践していく。彼女の生涯を貫く「一事敢行」の姿勢に学ぶところ、實に多大なものがある。

茨城県の女子教育へ

明治三三年（一九〇〇）旧藩校弘道館を仮校舎として、水戸に初めて高等女学校（現茨城県立水戸第二高等学校）が創立された。東奔西走していた英雄子であつたが、いよいよ郷里茨城の教育に尽力することとなつた。

明治三四五年二月に着任した英雄子は、歴史・地理・国語を担当した。既に五七歳となつてはいたが、三月には『女子家庭訓』上下巻を著作するなど、教育への情熱はますます旺盛

見識を加えて、英雄子は独自の保育論を形成していく。「幼稚園とは何ぞや」と始まる「保育の栄葉」では、幼稚園を、

多くの児童を集めてその児の健康と幸福

とを保ち、良い慣習を与えてしかも最高

の楽しみを得させるために、懇切に導く

ところの「一つの楽園」である

と規定した。また、純真的な児童は萌芽期の草木と同じであるから、その眞の性質を伸ばす

保育には、細心の注意が必要であると説いた。

更に保母としては、保育法に熟練すること

は当然であるが、最も大切なことは、

「春霞のたなびく如く、精神は常に爽快に」

と唱え、自らもその心構えを貫き通した。

「恩物大意」の中では、具体的な保育法に触れ、「唱歌」は普通のよく知られた歌を教え、

「遊戯」は輪形をとつて教師もその中へ入り、

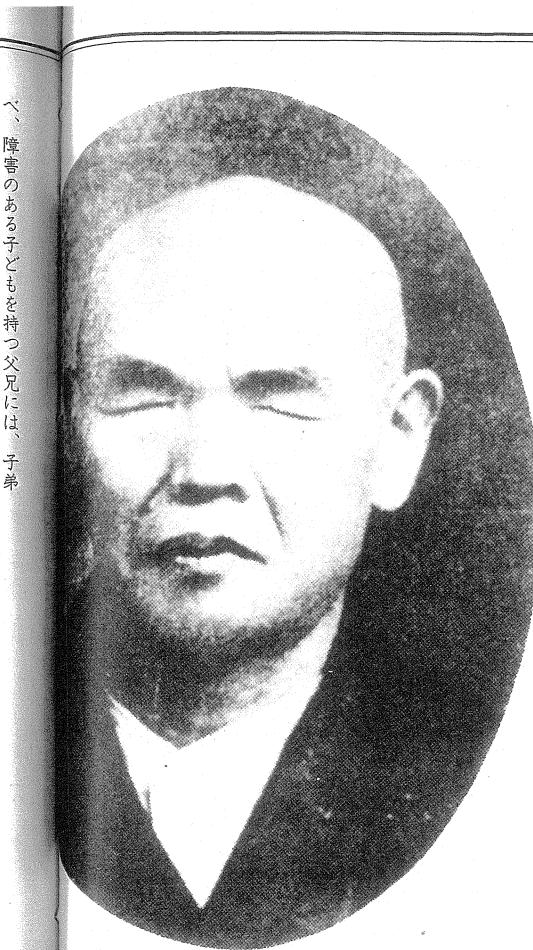
子どもど同じ心になつて遊ぶことの大切さも説いている。フレーベルの「母の歌と愛撫の歌」の中の「鶴舎」を翻訳した「家鳩」は、

幼児が手をつないで環をつくり、遊戯する唱歌として広く歌われた。

参考文献  
『豊田英雄子と保育資料』、『幼稚園教育百年史』、『茨城女子教育百年の歩み』、『水戸二高七十年史』  
（茨城県立歴史館主任研究員 仲田昭一）

# 視覚障害・聴覚障害教育の先駆者

石塚茂吉



「田アリテ日月ノ明ヲ知ラズ」

盲者ハ目二盲セリト雖モ心ニ盲セルニハ  
非サルナリ  
啞者ハ語ル能ハサルモ意志ナキニハ非サ  
ルナリ

この一節は、石塚茂吉が起草した私立下野<sup>じょつけ</sup>盲啞<sup>あ</sup>学校設立趣意書の一節である。石塚は、つづけてこれら視覚や聴覚に障害のある者をよく教え導けば、「知能を啓発し閼陋<sup>もろい</sup>を脱し、適當な生業を得る」ことができるだろうと述べた。

もちろん点字の本など無かつた時代であったため、先生の講義はすべて暗記で学び、成績は他の障害のない者に負けなかつたという。

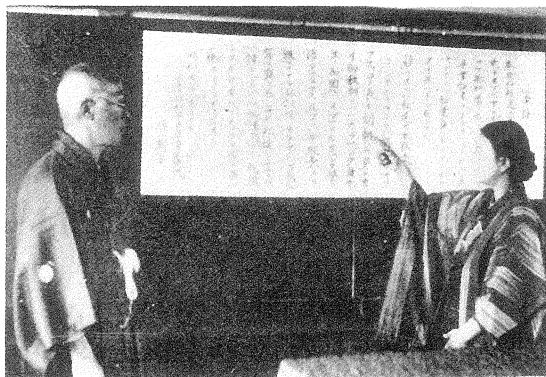
明治二六年には、上京して点字も習得した。

## 視覚障害教育の動き

明治元年四月といえは、戊辰戦争のまつた中で、官軍と旧幕府軍が宇都宮城をめぐつて激しい攻防戦を繰り広げていた。その一五日に茂吉は宇都宮町郊外の国本村で誕生した。そして五歳のとき患つた病気がもどり、失明してしまつた。

茂吉は突然に暗黒の世界に踏み込むことになつたが、わずか九歳で鍼治療<sup>しんじゆう</sup>の弟子入りをして、一八歳で鍼按師として独立した。その後の一五年間、すなわち明治一八年から三〇年ころまでが彼の本当の修業時代であった。漢学者円山信庸の静僕舎、船田兵吾の作新館で国語、漢文、地理、歴史等の一般教養を学び、宇都宮病院長大橋和太郎、のちには医師原久三郎から解剖学、生理学、病理学、診断学等の専門医学を修めた。

彼は、明敏な頭脳と旺盛な研究心を兼ね備え、何よりも負けず嫌いな性格を有していた。



手話中心時代の卒業式

江戸時代の視覚障害者のための制度が廃止され、いまだ近代的学校制度が確立しない当時、石塚の勉強は全く個人的努力に負うところであつて、他の視覚や聴覚に障害のある者は、わずかに師匠に頼つて伝統的徒弟制度で生業をたてていた。

そのような状況のなかで、本県で初めて盲学校の設立が企図されたのは明治二一年であつた。皇族、政府高官・県官、民間有力者を網羅して、視覚障害者の「学術を研究し風教を改進する」目的で本県に視覚障害者のための教育会及び盲学校を設立しようとするものであつた。この発起者の一人に石塚茂吉も名を連ねていた。しかし、この会は、実際に発足した形跡がない。

視覚障害者は相変わらず学習の機会を得られなかつたが、時代は進展して按摩・鍼・灸の三療もいづれ試験免許制が導入されると予想されるようになつていた。そのため、明治二九年、彼は独力で自宅に視覚障害者のために共向会を組織して彼ら子弟の研修の場を作つた。

## 私立下野盲啞学校の設立

明治三八年四月に、東京で、視覚障害者の全国大会が開かれた。宇都宮市からも石塚をはじめ数名が出席したが、大会の雰囲気などから、視覚障害者のための教育機関の必要を痛感して帰省した。

大会参加者を中心二つのグループがそれぞれ学校設立に乗り出した。一つは野州盲学校であり、もう一つが下野盲啞学校である。

この下野盲啞学校の設立者の代表が石塚茂吉であつた。冒頭に掲げた設立趣意書は、このときのものであるが、視覚や聴覚に障害のある者の置かれている現状を「目アリテ日月ノ明ヲ知ラズ、耳アリテ聞ク能ハズ、口アリテ言フ能ハズ」とし、学校で学ぶことによつて「暗黒ナル天地ヲシテ光明ナラシメ、悲惨ナル生涯ヲシテ快愉ナラシメ」と述べている。

両校は、明治三九年二月ほぼ同時に開校した。これが本県初の特殊教育機関である。私立下野盲啞学校は石塚茂吉が校長兼教員として医学科（按摩・鍼・灸）の指導にあたり、普通科はかつての恩師であり設立協力者の船田兵吾ほか下野中学校の教員が奉仕的に教壇に立つた。船田兵吾との付き合いはその後もつづき、石塚にどつては終生の理解者となつた。



昭和初期に建てられた盲啞学校



大正時代の宇都宮盲啞学校

### 点字は符号にあらず

石塚茂吉が勉強熱心であつたことは、弟子たちが口をそろえて述べている。毎朝三、四時には起床し解剖等の点字書を編纂した。また、新しい鍼穴をみつけた。自宅に点字圖書を多數置いて、だれでも自由に閲覧できるよう、「点字図書館」を開設した。

石塚は教育だけにどどまらず、視覚障害者の社会的地位を高める活動を数多く行っているが、その一つに点字投票権容認請願運動がある。大正一三年の総選挙で内務省は点字は符号であるとして、視覚障害者の投票権を認めなかつた。これに對して全国の視覚障害者は点字投票を認めよという運動を起こした。彼もこの運動に參加した。足利市で、この

先生に生き写しである。大兵肥満にして二十数貫あつた壯年時の佛のしのばれる逸品である。

石塚茂吉は、それを私せずに宇都宮盲啞学校に寄贈した。生徒が鍼を勉強するとき像に触れてつぼを知るのであるが、それは石塚先生に触れることであり、木の温もりから先生の教えが直接伝わってくるようにも感じられるのであつた。

多くの弟子たちに見守られ、昭和八年、享年六六歳の天寿を全うした。

石塚茂吉の蒔いた種は、やがて足利盲学校とともに県立代用学校から県立学校に移り、現在は、県立盲学校・県立聾学校としてりっぱに実つてゐる。石塚を模した木像も、県立盲学校に今でも残つていて、児童・生徒の勉強をあたたかく見守つてゐる。

校庭に元氣な歌声がこだましていた。

### 恩師石塚先生に贈る

「私は弟子は五〇〇人くらいいるよ」とよく言つたそうである。その弟子たちが大正一四年に先生の鍼灸創業五〇年、共向会設立三〇年、私立下野盲啞学校創立二〇年を祝して、感謝状と点字印刷機及び木像を贈呈した。木像とは、木彫の経絡人形のことである。これについて弟子の一人は思い出の記でこう述べている。

「これは先生が自ら素ッ裸になり、付近の彫刻家に頼んで挖へさせたもので、高さ三尺位、

当初の生徒は一〇人ぐらいであったが、そのうち幾人かは石塚先生の家から通學した。

学校は初め宇都宮市泉町にある石塚の自宅を予定したが、設立の認可がおりなかつたため、篤志家の寄付を得て近所に建てられていた。

下野盲啞学校と野州盲学校は二年後に合併して、私立宇都宮盲啞学校となつた。石塚はここでも設立者の一人に名を連ね、生徒たちの按摩・鍼・灸の学説と実技の指導教官として大正七年まで在職した。

### 参考文献

- 1 県立盲学校創立65周年記念誌 同 八十年誌
- 2 県立盲学校50周年記念誌 同 七十年誌
- 3 石塚保之「故石塚茂吉回憶録」
- 4 県連合教育会編「教育に光を掲げた人びと 第二集」田上隆司「本県特殊教育の創始者 石塚茂吉先生」
- 5 栃木県立文書館副主幹 仲田凱男

# 風土に根ざした教育の推進 「知行合一」「実践躬行」の人

田 部 井 鹿 蔵



渋川郷学を教育の理想に

この地の人はせまい所では人に先を譲ることしかし、大道では決して人後に落ちることを欲しない。ある時代のこの国の良さを渋川の人が受け継いでいるのは、郷儒堀口藍園翁の感化による所が大きいと思われる。

渋川駅前にあるこの碑文は、明治の前期にこの地方に大きな感化を及ぼした漢学者堀口藍園の遺徳を顕彰したものである。江戸時代、渋川は江戸と越後を結ぶ三国街道の宿駅であり、また、谷口集落として開けた市場町でもあった。この土地に一八世紀後

その生き方と学問に人間教育の理想を求めたのである。

渋川郷学に関する鹿藏の研究は、「隱士堀口藍園の尊皇精神」、県教育会誌に連載した「藍

半から一〇〇余年にわたって実学を尊び進取の気性に燃え、郷党的教化や郷土の發展に尽くした人々がいた。吉田芝溪、木暮足翁、高橋蘭齋、堀口藍園等である。師弟關係で結ばれたこの人々の学風を後世「渋川郷学」と呼んで、地域の教育の基本においているのである。

大正後期から昭和初期にかけて、渋川郷学の先覺の事績を掘り起こし、渋川郷学を再び

町民の心によみがえらせ、地域の教育の中に積極的に取り入れたのが田部井鹿藏である。

大正七年一二月、鹿藏は群馬郡渋川尋常高等小学校訓導兼校長として着任した。当時は大正デモクラシーを背景として、新しい教育思想や教育実践が相次いで現れ、試みられた時代であった。一方、群馬県では明治四年に出されたいわゆる「四大教育方針（就学出席の奨励・学校基本財産の増殖・指導内容の充実・社会教化）」の実施過程でもあった。この方針の第四項「小学校ヲ以テ教化ノ中心タラシムベシ」は、社会教育の普及發展のために小学校が中心的な役割を果たすように指示されたものである。

このような時代にあつて鹿藏は、公職多忙の中で渋川郷学の研究にも意欲的に取り組んだ。渋川の地域教育の人脉である吉田芝溪や堀口藍園などの人物像や生涯を調べた結果、



渋川駅前にある藍園顕彰の碑

## 女子教育への取組み

鹿藏は女子の教育に強い关心を持っていた。二五歳の時、邑楽郡教員会の論文募集に「県下女子教育の改善発達を図る方法」で応募し第一等に入選した。彼の主張した女子教育は「儒教と西洋道徳を採長補短し、これを日本の実情に調和させる」という主旨のものであつた。

圓堀口貞穂先生『芝溪吉田友直先生』など数の著作となって残っている。著作のほかにも、これら的人物との業績についてたびたび講演をしたり、ラジオで放送したりして広

渋川尋常高等小学校長として着任して間もなく、鹿藏は町立実科高等女学校の設立に着手した。当時、渋川周辺には女子の中等教育を施す学校がなく、前橋・高崎へ行かなければ勉強ができないのが実状であった。そのため、鹿藏は町長羽鳥年太郎を説得し、町議会、郡議会の賛同を得て、県庁に日参するなど東奔西走した。この努力で渋川周辺の人々の長い間の願いがかなえられ、大正九年渋川町立実科高等女学校が実現したのである。

鹿藏は小学校長で初代実科高等女学校長を兼務し、「質素・勤勉・正直・健康」を教育方針として学校の経営にあたった。体操を重点に位置付けるなど、当時の女子教育としては進歩的な経営方針を示していた。

### 青年はひたすら勉強せよ

鹿藏は漢学の造詣が深く、儒教的人生観に立つて自分を律し、高い識見をもつて教員の資質の向上に努めた。彼自身が実践して体得した信条で、県下の教員によく知られている教員訓は次のようである。

青年教員は主として勉学すべく、中老年の先生はあげて之を助勢し、中年教員は主として働くべく、老年教員は主として徳を成すべし。

彼は部下の教育技術の向上を目指して授業

### 教員の待遇改善

人一倍正義感の強い鹿藏は、普通教育者の地位の向上と待遇の改善にも大きな役割を果たした。從来小学校教員の給与は市町村の負担であったが、大正末から昭和初期にかけての経済不況のため、給与の遅配や欠配が生じていた。彼は「職責重大なるものが待遇不安に置き放しになつてゐることは、国家的にも社会的にも不合理」であると主張して、教員給与を国庫負担にするために熱心な運動を始めたのである。

昭和八年、第一〇回全国連合小学校教員大会で、鹿藏は小学校教員の俸給は國家支弁でなくてはならないと訴えた。そして、翌九年から一〇年間全国連合小学校教員会副会長を務める中で、「当然の主張は堂々と主張すべきである」として、常に先頭に立つてこの運動を進め昭和一四年にその実現をみたのである。

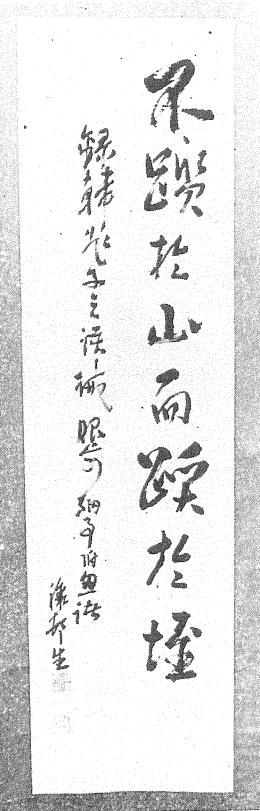
### 鹿藏の生い立ち

田部井鹿藏は、明治一三年（一八八〇）一月一二日、渡良瀬川に沿う邑楽郡渡瀬村（現館林市）足次に生まれた。高等小学校卒業後、

明治四三年に新田郡尾島尋常高等小学校訓導兼校長となつた。翌年八月、未曾有の利根川洪水で学校も大きな被害を受け、手のつけようもない惨状であったが、職員や町当局、町民



顕彰委員会によって建てられた鹿藏の胸像



鹿藏の揮ごう 号は猿郎

研究会を連続で実施したり、学期ごとに個人研究の発表会を行つたりして、仲間同志互いに励まし合つて向上するように仕向けている。また、人を見る目も持つて、教職で失敗した者や、未熟な教員も、彼の下では立派にその力を發揮したと言われている。

### 社会教化

鹿藏は社会教化の一環として成人教育にも尽力した。青年会・処女会の会長となり、「世の中に迷惑をかけない人間になれ、世の中に少しでも役立つ人間になれ」をモットーとして、雄弁大会・バザー・敬老会等多くの活動を組織的に行つた。後に、当時の青年会員の一人は次のように述懐している。

鹿藏は社会教化の一環として成人教育にも尽力した。青年会・処女会の会長となり、「世の中に迷惑をかけない人間になれ、世の中に少しでも役立つ人間になれ」をモットーとして、雄弁大会・バザー・敬老会等多くの活動を組織的に行つた。後に、当時の青年会員の一人は次のように述懐している。

ある時、(鹿藏)先生の家を訪ねたら、町の先覚者吉田芝溪先生のお話で一夜をあけた。その後、芝溪先生の墓地が非常に荒廃していたので、吉田家の了解を得て先生と元町青年会で墓地の掃除をした。墓標を立て柵をめぐらした。作業終了後芝溪先生の学問と芝中開墾の苦心談を聞いたことが懐かしく思い出される。(略)

鹿藏の業績は以上のほかにも町立図書館、町立幼稚園の創設に尽力し、それぞの長を兼ねるなど多岐にわたり、二四年余渋川町の教育を一身に担つていたのである。この間にも学事会長や教育会長を歴任し、郡・県の教育の発展に貢献している。

の協力を取り付けて復旧にあたり、予想外に早く授業を再開し、町民の心を強く打つた。

大正二年（一九一三）、三四歳で県下でも大郡の群馬郡視学となる。公正で教育の理論と実践に精通していた彼は、全郡各方面の信頼を得て教育諸事業の革新を図ることができた。

しかし、大正五年七月、部下の失敗の責任を

とり郡視学を依頼免となる。

だが、すぐに懸念されて同年八月佐波郡玉村尋常高等小学校訓導兼校長となつた。毎日の授業の充実による教育実践の深化、教育者としての学識向上、体操の奨励等を教育方針として学校経営にあたり、この時期に「玉村教育」の礎を築いたのである。

大正七年、渋川尋常高等小学校へ着任してからの主な業績は前に述べたとおりである。昭和一八年に校長を退職した後は、県教育会主事を、戦後は県選挙管理委員、退職公務員連盟理事長（県）、同常任理事（全國）などを務め、昭和二三年に公選による県教育委員に当選、翌年県教育委員長となるなど、県教育行政にも貢献した。

昭和三十一年五月、正五位に叙され、勲五等旭日章を授与され、その年の六月、七十六歳で病没する。

昭和二年、田部井鹿藏先生遺徳顕彰委員会によつて、渋川市立北小学校に胸像が建つ。（群馬県教育センター第一研修部長 須藤新威）

# 先生の存在が村の誇り 不言感化の教育

増田玄次郎



## 生い立ち

埼玉県秩父郡吉田町立吉田小学校には、校舎を背にし校庭を見渡すように、同校初代校長増田玄次郎の胸像が立つてゐる。先生の遺徳を偲んで、昭和二六年（一九五一）に増田校長頌徳会が建立したものである。

増田は創立以来三二年間にわたつて本校の校長兼訓導を務めたが、村の人々は「この吉田にはどりたてて誇れるものは何もないが、増田先生がおられることがだけが、たつた一つの誇りである」と語り、他町村から転住してきた者は「この村に住んでいれば子どもが増田先生に教えて貰うことができる幸せがある」と言つたといふ。

増田玄次郎は元治元年（一八六四）群馬県館林町の増田禎吉郎氏の次男に生まれた。家の都合で、埼玉県北埼玉郡三田ヶ谷村の叔父のもとで厄介になつて少年時代を過ごした。生來の資質に恵まれ学問に志したが学資の途なく、明治一一年（一八七八）一歳で北埼玉郡今泉小学校を卒業すると、地元の小学校の代用教員になり、学問を続けながら学資の蓄積に努め、同一九年（一八八六）二二歳で埼玉県師範学校に進んだ。

師範学校は多數の志願者の中から三〇名を

二五年目には、県視学就任の内諾を求められたが、これも辞退した。

増田は「此の我儘なる村夫子の個性を提げて本県教育界の中心に出て官海の人となれば、上は人の容る所とならず、下は人を容ること能はず、衆目具胆の中に立ちて茲に生の短所を暴露し、半文の価値なき醜形骸を止め、遂に個性の己を殺し、推舉の厚意を傷付けるに至るや必然なり」とも、「二十五年の知己を有する現在地、寧ろ埋骨青山の感あり。或は一個の村民として余力を村教育の一部に尽くし、以て村民多年の待遇に報うるもの不可ならず。切々の衷情、暮夜巾を沽す。更に思ふ、十四の同僚と、天真爛漫六百の愛児と、幾千百の卒業生とを捨つるは衷心忍びざるものあり」という心境であつた。

## 不言感化の教育



埼玉師範学校在学中の教え子たちと先生

増田教育の真髓は「不言感化」の教育である。

「百の説法より一の実行尊く、百の訓言より一の教師示範に真価あること忘るべからず」という率先垂範の教育である。

ある教え子は「先生の目から見たら、多くの人は皆物足らぬ感じがしたろう。子どもに對しても、もつと叱りたかったことが多かつたろう。先生のお小言はあるいは先生として最小限度に言われたものではあるまい。そ

明治二三年（一八九〇）抜群の成績で師範学校を卒業したが、そのころ、下吉田村では高等小学校創設のため、師範出の優秀な教師を求めて、増田に白羽の矢を立てた。

増田は既にほかに赴任のはくなつていてが、これに応じて下吉田小学校の校長兼訓導として赴任した。時に二七歳。以来、三二年間にわたり、教職生活のすべてを吉田村の教育に捧げ、他を顧みることはなかつた。

この間にも、他町村や附属小学校から招聘へいの声がかかつたが、そのつど断り、就任して

の心の中、腹の内では肝を煎り、我慢もされたのだろう。そうして実行自ら勤め慎み、もつて範を示されたのはあるまいか」と述べている。

また増田式指導法の特徴は、予習・復習を徹底し自發學習を重んじた。その指導ぶりは厳格で、一度やらせようとしたことは必ずやらせた。ちなみに、吉田小学校の卒業生の字形筆勢はみな酷似していて、文字を見れば増田の教え子であることが分かつたといわれた。彼の指導はそこまで徹底していた。

しかし増田は、子どもにやらせるだけではなく自分でも人の数倍の苦心をした。添削物を片付け終わつたら、東の空が白んでいたということも珍しくなかつた。

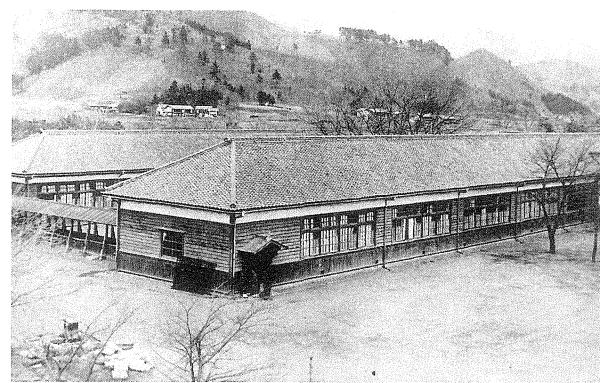
また日ごろから自らの行動を児童の模範となるように振舞つていた。教え子の字が増田の手跡に似ていたというが、今も学校に残る増田自筆の学校沿革史を見ると、教科書のように端正な楷書で綴られており、教壇に立つても、教壇から下りていても、生活態度は不变であつたことを物語ついている。

## 卓抜した經營理念と実践

明治中期、改正小学校令が実施されたころは県下一般の経済状況は困窮を極めていた。そのため教育制度にも不満の矛先が向けられ、マルモノニシテ、之が為ニ保護者ノ負担ヲ増サザランコトヲ期スル」ものであつた。この積立ては実に昭和六〇年（一九八五）まで続けられた。戦後、一円に値上げしたが、預金額は利子も含めて五七万円余になつた。学校は平成元年、地区指定の体育研究を期にこれをもつて体育用具を購入したという。また、増田は「自炊金」なる教職員の親睦会を作つたが、当時の記録を見ると、源平二手に分かれ、それぞれが野菜や肉や酒などを持ち寄つて、工夫を凝らして自炊料理を競いつつ親睦を深めたようである。和氣あいあいの雰囲気が伝わつて来るようである。ちなみに、自炊金は今もなお連綿として続いている由。



校庭に立つ増田玄次郎胸像と歌



吉田小学校旧校舎（昭和2年3月撮影）

こんな事態に際して、増田は「改正小学校令に関する責任は専ら教育政務家にあるが、具体的なことについては教授者の運用如何にも半分の責任はある」とし、これに処するには、「学理を以て實際を律せんとするべからず、咄嗟の間に成功を収めんとすべからず、一失手を掛して吾事止めりと断念すべからず」と覺悟し、「須く前後を慮り、謹慎事に從い、寸伸尺出着々その歩武を進むべし。語を易えて言えば、誠心誠意、我が天職に安んずべし。この精神に堅からばその功期して俟つべく……」と自戒した。

増田式經營の実践規範は、周到な準備と、熱烈な実行と、周密な整理をすることであつた。案なくして事をなすことはなく、事を行う場合は完全な遂行を期し、業務終了後の整理反省はきちんと行つて次の企画の基となる。つまり、Plan-do-seeのマネージメント・サイクルを徹底したのである。

増田はアイデアマンでもあつた。大正七年（一九一八）から学校の基本財産を積立てるために、児童に毎月一銭を拠出させることにした。「此ノ一銭ハ、児童ノ不時ノ小遣錢又ハ学用品ノ節約ヨリ生ミ出シタル錢ヲ拠出セシム」などと自戒した。

の笑顔で、時に「ハハ大笑される」と皆の笑いも誘つた：公人姿の先生と家庭におけるお父さんと、両面をもつていた」とも言つている。私人としての増田は、人生万般・四季折々の歌を詠み、友人を大切にして家族的に交際をし、家庭もまた大事にした。「今日は障子張りをして遊びう。障子張りなどは遊びのうちだ」などと言つて家事も厭わなかつた。

大正二年（一九一三）村立図書館に書籍一冊を寄贈して木杯一個を下賜されたが、以後毎年のように五〇円ないし二〇円の私財を図書館に寄付する篤志家でもあつた。大正一一年（一九二二）五月七日、秩父郡西部講習会が小鹿野小学校で開かれ、増田はその講師として衛生講話をしていた。

講話が「五分ほど進んだとき、突然倒れ、宿直室に運ばれた。増田は「半身不隨／やられた／増田の一生も終わつた！残念！」と叫び、また、「進行々々ノ会の進行を……」と最後まで講習会の繼續を氣遣つていた。

やがて、医師が駆けつけて百法手当を尽くしたが病状は悪化して昏睡状態となり、翌朝自宅に移された。吉田小学校の西の県道に七五〇名の教え子が不安の眉をひそめ快癒を祈りつつ迎えたが、八日の午前一〇時ごろ永眠した。

享年五八歳。正八位勲八等に叙せられた。

だから教え子は「寛いだときの先生は格別  
教え子のだれもが「増田先生といえど『こ  
わい顔』を思い出す」という。つまり、増田  
は「おつかない先生」であった。洋服姿でキ  
リリツとして、寸毫も侵すことのできぬ風貌  
で一語にも威厳がこもっていた。しかし、各  
地に旅行したときには、寸時を利用して、そ  
の地にいる教え子を必ず訪ねて激励するなど、  
内には温かい教育愛が燃えていた。

だから教え子は「寛いだときの先生は格別

# 土に生きた教育者

塩田せつ

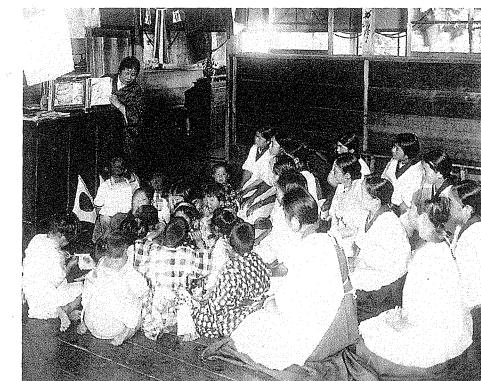


塩田せつと家政女学校卒業生

しかも、その疲弊度は、第一次大戦後の慢性化した経済不況の中で、一層深刻さを増していった。

## 二、兎の村

大正一年四月、村の小学校長として、小林孟雄が着任した。近在の大森町（現在、印西町）出身、年齢二八才、初任の校長であった。



紙芝居を演ずる塩田せつ（家政女学校で）

彼は、学用品を満足に買い備えられない多くの学童を目にして、兎の飼養を思い立った。

大正一二年一月校内に養兔部を作り、児童たちに飼養させた兎を東京医科大学及び東京神田須田町の兎料理店へ納入し、収益を学用品の購入や貯金に充てさせた。学校に出入りする村の青年男女にも兎の飼養を勧め、さらに一般農家にも広めていった。飼料は、周りの堤防や田の畦道に無尽蔵であった。一四年、同村三九六戸のうち三四九戸が兎を飼養し、頭数二三八三頭、一万円もの収入をみるまでに至り、新聞が「兎の村」として紹介した。

また、他村から購入していた野菜の自給を図り、学校を通じて、栽培を奨励した。こうして、大正末期には、布鎌村は、県当局から、

村の立直しを自力で達成した「模範的農村」

塩田せつは、明治二〇年、布鎌村の隣町、木下町竹袋の飯田家に生まれた。薬局を営んでいた生家が経済的に苦しかったため、「官費」

が、訓導塩田せつであった。

## 三、女の力

との評価を得たのであった。

当時の布鎌村は、「学校が村の教育文化は勿論産業の中心であり、「村全体が学校を中心として動いていた」感があつた」という（岩井喜久衛氏記）。その「学校」にあつて、小林校長の実質的な片腕となり、その活動を支えたのが、訓導塩田せつであった。

が給費される千葉県師範学校に進み、三七年に卒業した。日露戦争が勃発した年である。成田尋常高等小学校訓導を経て、母校の附属小学校訓導へ転じたが、四一年、布鎌村出身で、岩手県宮古水産学校教諭の塩田愛隣と結婚し、所帯を宮古に構えた。しかし、彼女は、家庭にこもることなく、宮古女子尋常高等小学校訓導として、教職の道を続けた。四三年、夫が北海道小樽水産学校へ転勤した。彼女も小樽区豊徳女子尋常高等小学校に転じた。宮古、小樽時代の彼女の足跡は、今、知る術はないが、この異郷における一〇年余の教職経験が、彼女にとつて、得難いものであつたことは、その後の歩みが物語つている。

第一次大戦が終わつた大正八年四月、夫隣は、當時猛威をふるつていた流行性感冒により、急逝した（享年四〇才）。彼女は退職し、年端のいかない一男三女を連れて、布鎌村の亡夫の実家へ帰つた。彼女は、義理の両親に仕え、一男三女を養育しながら、同年九月、布鎌尋常高等小学校訓導となり、再び教職の道へ戻つた。彼女にとつて、最大の苦闘の時期であった。後に、出産前の女教員の身上を思いやり、同僚の女教員の同情と親切が、「どんなに嬉しいものであり、「温い人の情」を感じさせるものである」と述べ、「私たちは苦労してはじめて人になりまた人が分かるのである」と、記したのも、実感であつたこと

千葉県と茨城県の県境、利根河畔の千葉県印旛郡布鎌村（現在、栄町）は、以前は、このようにいわれていた。

「いもしま」とは、四囲を利根川とその分流によつて囲まれた島状の地形で、その形状が芋に似ていることにちなむといわれ、また、「もろこしだんご」とは、水稻單作の村でありながら、住民の主食がもろこしなどの雑穀であつたからだという。

地勢上も、交通的にも、周囲から孤立した僻村であり、經濟的、生活的に恵まれぬ小村であつた。明治末期、郡内で、唯一、荷積み馬車がない村であり、また、專業の商工業者がいない村であつた。

加えて、利根川の氾濫原に立地していた布鎌村は、度重なる水害に悩まされ続けていた。明治四三年八月の大洪水の際には、堤防が決壊し、濁流が村内全域に溢れ、小学校の床上七八cmに達し、滝水は一ヶ月以上におよんだという。その間、同校は臨時休校を余儀なくされ、もちろん、稻作は壊滅した。

大正期の布鎌村は、「疲弊農村」であつた。

## 一、布鎌 いもしま もろこしだんご

と思われる。

布録小時代の彼女が、当初、熱心に取り組んだのは、低学年の学習指導であった。志垣寛の低学年の指導観に共鳴し、また、奈良女高師附属小の「合科学習」に強い関心を寄せ、高師附属小の「合科学習」に強い関心を寄せ、彼女自身の授業観が児童中心主義に立つものであったことは、彼女の授業記録「読方教育法の実際」にうかがえる。

このようなかな、彼女の活動の重点は、次第に農村の青年子女教育に移つていった。「疲弊農村」布録村を教育の力によつて更生しようとしていた小林校長は、大正一二年、自校に併設されていた農業補習学校に女子部を設けた。翌一三年九月、彼女は、農業補習学校助教諭を兼任し、女子部の指導を委嘱された。

また、女子部の生徒が村の処女会（後の女子青年団）の構成員でもあつた關係から、処女会活動の指導助言にも当たつた。

大正一四年、布録村処女会は印旛郡聯合処女会の表彰を受けた。翌一五年、布録農業補習学校が県知事表彰を受けた。さらに、昭和三年には、布録村女子青年団（前年処女会から改称した）も県知事表彰を受けた。このように、布録村の青年子女教育の成果は、公私ともに高く評価されたが、それは、小林校長の指導性の發揮と彼女の実際面の指導に負うところ大であつた。彼女自身も、昭和二年、

黒柱としての主婦を育成する学校であつた。当時の農会幹事で、同校校長を兼ねた山崎時治郎は、塩田せつを招き、指導の実際面を委ねた。彼女は、同校の使命を、「真に農業を理解し、農村婦人としての立場を自覚し、自ら家庭実生活の改善進展に努力せんとする能力及德操の涵養を、より具体的ならしめん」とあるなどと、農業を嫌い、都会生活に憧れる農村の子女を、農村に定着させることを目指した。

彼女は、昭和三年九月の着任以来、二〇年三月に退職するまでの一六年余を、教諭兼舎監として精励した。全寮制の下で、学校全体を一大家族に擬したなかで、彼女は、寮生にとって、「我等のお母様」であつた。同校の校訓「ニコニコ イキイキ イソイソ」と呼べば応えん「腰軽く」は、正に、彼女のパーソナリティそのものであり、そのふくよかな風貌、こまやかな気配り、「音律あるさわやかな声」等々、「慈母」のイメージで、慕われた。



蘇我時代の家政女学校と塩田せつ(左から二人目)



農作業へ向かう家政女学校生徒

千葉県教育功労者表彰を受けた。表彰者中、女性は彼女のみ、また、訓導も彼女一人であつた。その表彰理由は、一に「教育ノ地方化」、社会派のキリスト教文学者沖野岩三郎の「新らしき家庭教育と婦人の責任」、東京農業大学教授沢田五郎の「農村問題小観」などの講演会を開いていた。

力を入れたのは、料理と裁縫であつた。村の二努メ……常二実践窮行ヲ示シ」であつた。

補習学校、処女会の指導において、彼女が力をいたのは、料理と裁縫であつた。村の力、「品性の修養」、「一事實行」、「嫁と姑などのほか、婦人運動家市川房枝の「婦人の力」、社会派のキリスト教文学者沖野岩三郎の「新らしき家庭教育と婦人の責任」、東京農業大学教授沢田五郎の「農村問題小観」などの講演会を開いている。

また、「新らしき時代に必要な婦人としての資格を涵養するため」、読書会、講演会をしばしば開いた。地元小学校職員（彼女もその一人であつたろう）による「女の力」、「子女の教育」、「品性の修養」、「一事實行」、「嫁と姑の教育」、「社会派のキリスト教文学者沖野岩三郎の「新らしき家庭教育と婦人の責任」、東京農業大学教授沢田五郎の「農村問題小観」などの講演会を開いている。

た。

#### 四、ニコニコ イキイキ イソイソと……

金融恐慌で明けた昭和初期、千葉県の農業界は、疲弊した農村の振興策が大きな課題であつた。昭和三年、千葉県農会（現在の千葉県農業協同組合の前身）は、「興村振業」「農村生活改善」を教育の力で実現したいとして、農会立家政女学校を設立し、翌年一月、千葉県蘇我町（現在、千葉市内）に開校した。「蘇我の花嫁学校」（昭和一八年山武郡土気町に開校）では、「どちら、や帯を、美化・合理化を観点に改良し、村民の縁物を請け負つて、現金収入の道を図り、收入の一部は学校の共同財金、残りは各人に貯蓄させるなど、

て、存在し続けた。時代の荒波の中で、もがき、悩んだ卒業生たちにとって、彼女が大きな心の支えであり続けたことは、卒業生らの数々の音信の中にうかがうことができる。その卒業生のほとんどは、無名の農村の主婦となり、戦中、戦後の千葉県の農村を支えたの

なり、出来事であつたともいえよう。

廃校後、その組織と生徒は、千葉県が設置した千葉県青年学園家政部に引き継がれた。同家政部は、その後、千葉県農村青年研修館農村青年学園家政部から同研修館農業高等学園家政部等を経て、今日の千葉県農業大学校専修科に至つている。

その間、昭和四八年七月、かつての家政女学校の所在地（千葉市土氣町）に、教え子約一一〇名の手による大顕徳碑が建立された。同碑は、その後、千葉市大金沢町にある千葉農業大学校専修科の構内に移され、現在も、彼女の余徳を伝えている。

なお、本稿をまとめるに当たり、主に、次のものを参考した。

○千葉県農村青年研修館『館史—家政女学校農村道場からの発展—』

○岩井喜久衛「小林孟雄先生—野武士的な育成」（印旛三羽鳥の一人）—（千葉教育二二一号）

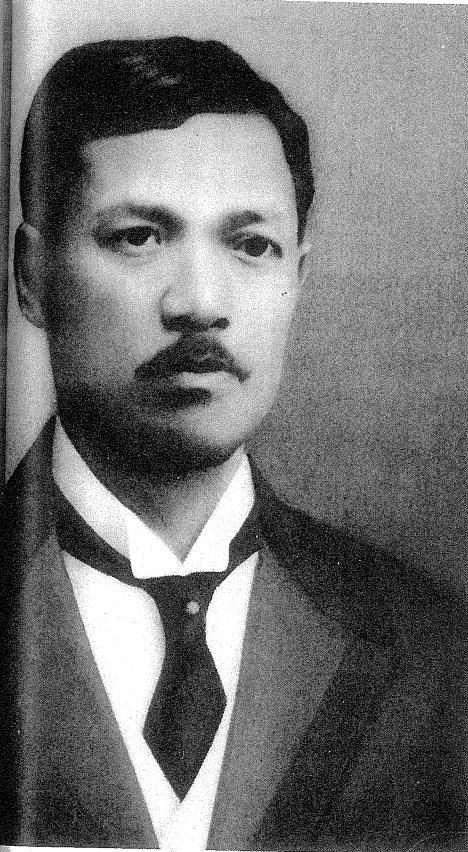
○吉井孝次郎「元農会立家政女学校の塩田せつ先生」（千葉教育二二五号）

昭和三六年四月、家政女学校は不慮の火災により全焼し、翌年三月、同校は廃校のやむ

（千葉県総合教育センター研究指導主事 山本直彦）

# 私は戸倉の土となる 村と子どもたちへのひたむきな愛

正田 浩四郎

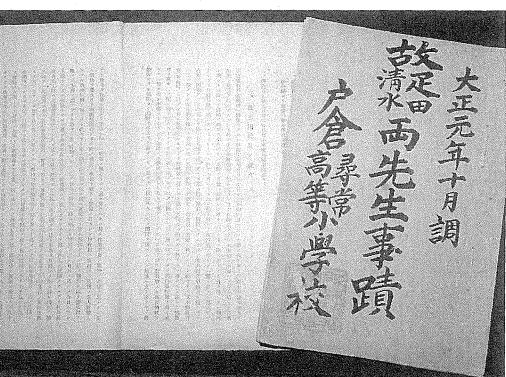


## 荒廃した村

東京の西の端、五日市町。その風光明媚な自然環境で、日曜日ともなると、都心や近郊の人々が一時の安息を求めて来るこの町は、明治一四年、すでに、民衆の手で民主憲法が起草（五日市憲法草案）されていたのである。その町から奥へ行きつくところ、戸倉村。林業で栄えたこの村も、当時、折からの経済不況（松方正義＝明治・大正の政治家。大正一四年大蔵卿となり、紙幣整理、日銀の設立、金本位制の実施など日本資本主義の発展に尽力によるデフレ政策）のあおりで、村全体が苦境にさらされていた。役場は腐り、学校は朽ち果て、村の財政は、極めて困窮した状態であった。

村の財政混乱と村人のすさんだ意識が頂点に達しているとき、足田は赴任してきたのである。

さらに、足田には、郷里（兵庫県）に残した父親があり、毎月三円の仕送りをしなけれど、父の死後、毎月三円の仕送りをしなければならぬ。そこで、毎月三円の仕送りをしなけれど、父の死後、毎月三円の仕送りをしなければならぬ。



祝文

## 貧窮を支えた教育愛

村がこうした状況の中、足田の給料も一〇円の約束が五円しか支払われず、やがて、その五円さえも支払われず、給料の欠配が三年間も続いた。

さらに、足田には、郷里（兵庫県）に残した父親があり、毎月三円の仕送りをしなけれど、父の死後、毎月三円の仕送りをしなければならぬ。

## 殉教の門出

「お氣の毒なこつたよ。あの校長さん、この村のこと何もお知りにならねえから、大方、こんなよいところはねえ、と思ってござらつしやるだろうよ」。

村の学校に転任してきた足田を道で迎えた村人たちは、ため息まじりに話すのであった。

時は、明治一七年五月三一日。県から村の学校の訓導兼校長として任命された足田浩四郎は、この年、三十六歳。手にすくいたいほど清らかな秋川の流れに沿った道を、意氣揚々と、妻のふく子、一人息子の盛一とともに、人力車の上であった。所は、当時の神奈川県、今の大田区西多摩郡五日市町戸倉、戸倉小学校である。

しかし、坂道を登りつめた所で降ろされた足田は、目を疑つた。門もなければ玄関もない。一棟の古い校舎らしきものは、壁は落ち軒は傾き、あばら家同然だった。

「これが学校か？こんな学校が日本国中にあるのだろうか。うむ」。

足田の苦しみの第一歩は、こうして踏み出された。

はならなかつたため、足田の生活は貧窮のどん底であつた。食べるためには、自分の服、書籍はもとより、妻の持つてきた着物も質屋に入れなくてはならなくなつた。一家の生活は、妻の仕立て物の内職のわずかな収入の上に成り立つていた。

しかし、一家が瘦せ細つていく生活の中にあつても、足田の意氣は少しも衰えなかつた。むしろ、足田の教育への情熱は、火のごとく燃えていた。教壇に立つた足田は、いつも子どもに向かつて言つた。

「早く大きくなつて、この荒廃した村を昔の姿に取り戻してくれ」。

足田の熱意に強く心打たれた子どもたちは、懸命に勉強し、その結果は、めきめきと現れた。地図もなければ歴史の掛け図も実験道具もない学校だったが、足田が赴任ってきてわずか一、二年の間に、貧乏村の貧乏学校の子どもたちの成績は、県下で二、三番というりっぱなものになつていった。

## 理想と現実のはざまで

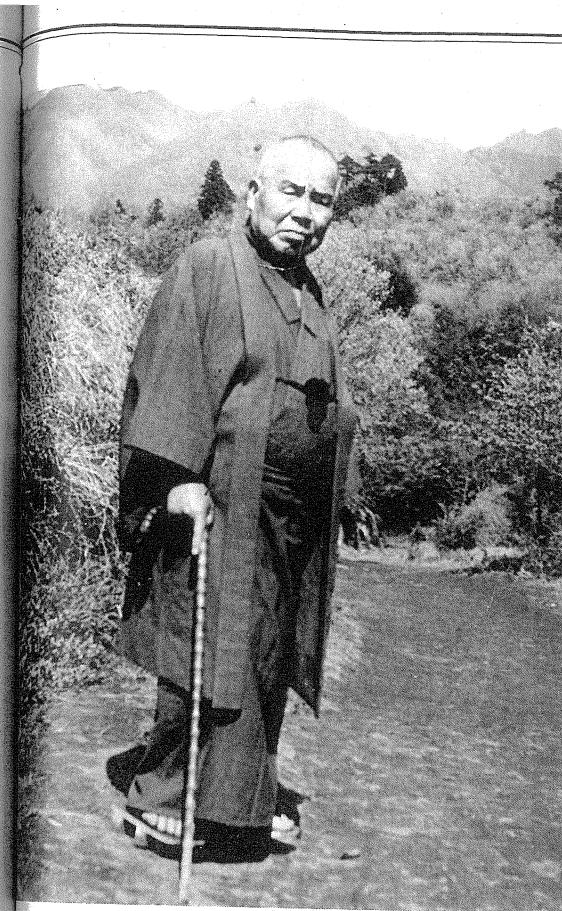
足田の苦境を知る隣村の校長や同校の清水訓導は、他校への転任を勧めた。しかし、足田は断り続けた。

そんなある日のことである。内職をしていたふく子が縫い物を置いて真剣に言つた。「あなた。どうぞ思い切つて転校してください



# 村づくりに一生を捧ぐ 行動派の教育者

## 長谷川一郎



### 教職をめざす

長谷川一郎は、明治一三年（一八八〇）二月一八日、津久井郡内郷村（現同郡相模湖町）に父茂平、母クマの長男として生まれた。

父茂平は学務委員を務めたほどの学校教育に熱心な人だった。その影響を受けた一郎は尋常柳沢小学校（現相模湖町立内郷小学校）を卒業後、当時鎌倉町（現鎌倉市）にあつた神奈川県師範学校に入学した。

明治三四四年（一九〇一）三月、同師範学校を卒業した一郎は、津久井郡高等協心小学校（現同郡津久井町立中野小学校）訓導として教職の道についた。この学校で一年ほど教鞭をとつたが翌三五年九月、生まれ故郷である

自らの出身小学校でもある内郷村の尋常高等

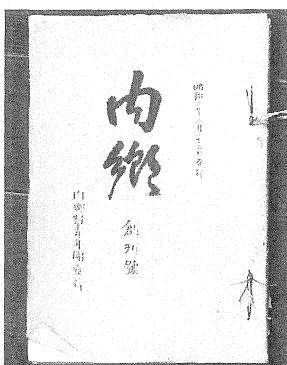
余りの山地に植樹できることとなつた。

こうして児童、教員とともに、明治三九年、杉の苗三〇〇〇本を植付けたのを手はじめに以後二二年間、一年も欠かさず杉、ひのき、松を毎年三〇〇〇本植えつけた。枯れた木

は補植し、ついに約六万本の成木となつたのである。

内郷小学校の訓導となつた。付近の山々は荒れており、大雨による土砂崩れの心配さえあつた。このようないくつかの状況の中で、一郎は将来の学校運営を考慮し、また治山の重要性を考えて明治六年、学校林を經營するための第一歩を踏み出した。まず高等科児童に杉の苗を育てさせることにした。いわば小学生に農業実習をさせたのである。

この杉の苗木も三年目になると植付苗に成長し、一郎は植樹する場所をさがし始めた。村の有力者に相談するが、「植林のような厄介な仕事は大人の我々が經營しても困難な仕事なのに、児童だけで実施するなんてどうてい可能だ」という答えが返ってくるのみであつた。しかし彼は失望せず、新しく村長になつた宮崎基重に話を持ちかけた。一郎の熱心さに心を動かされた宮崎村長は、早速関係者と協議し、その結果、隣の日連村（現津久井郡藤野町日連地区）との境付近の二〇町歩（二ha）



内郷村青年会雑誌『内郷』

### 体験的道德教育

長谷川一郎は、植林という息の長い仕事を

児童に体験させたが、「親孝行」についても体験的教育を行つてゐる。それは郷土内郷村が生んだ、当時の観念では理想的な婦人像ともいえる平井ハツの墓参であった。

平井ハツは、文政九年（一八二六）、内郷村に生まれた。一八歳の時、同村の治兵衛と結婚するが、苦しい生活の中で夫は病氣になり、懸命の看病にもかかわらず帰らぬ人となつた。ハツが二二歳の時である。それから老父母を支え、二児を育て、農業に精を出したこと三〇年に及んだ。その働きぶりは明治二年（一八六九）には小田原藩から、同五年には足柄県庁から表彰されるほどであつた。

子どもを夫の形見とし、夫の両親に仕えることを女の道と考える人であつたのだろう。一郎は、この平井ハツを郷土の誇りとし、児童たちの学校林管理作業は、大変つらかったようだ。現代と世相が異なるとはいえない。周囲の人々の理解を得て、この植林事業を成

「いうことがよくわかつたような気がする」と  
思い出話の中で語っている。

ここにも一郎の、体験を重視した人づくり  
のありようがよく表れている。

## 青年会の結成

大正時代、全国的に小さな山村は貧しかつたが、内郷村もその例外ではなかった。當時を知る人々は「お弁当はさつまいもだつた」「貧乏もどん底で学校へ弁当を持つていけない子ども多かった」「女の子は、四年生までは学校にくるが、五六六年になると、働きに出でずいぶん減った。男子も年季奉公に出された」と口々に語っている。

校長であつた長谷川一郎は、このような状況の中で青年を村にどめておくため、青年団を結成しようと考えた。

内郷村は、神奈川県下でも比較的早く、明治三六年（一九〇三）村立実業学校を設立し、農業補習教育を開始したが、一郎はこれら補修学校生徒を中心に行明治四三年、内郷村青年会を組織した。会員は一五歳以上三〇歳以下の男子であつた。青年会は会員の共同事業から生じる収入によつて運営し、主な活動は図書閲覧所の設置、道路補修工事、小学校校庭等の維持管理、水田への稲の植付け、農産物評会の開催、篤行者の表彰など多岐にわたつてゐる。

（昭和一二年まで）になつてゐるが、このときこの遺跡の保存に大きく貢献している。寸沢嵐遺跡について詳しく述べ省に報告し、昭和五年一月、文部大臣の指定する寸沢嵐石器遺跡保存施設となつた。

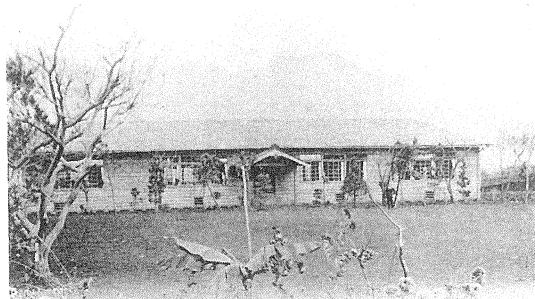
また、村長時代、民俗学者柳田国男が内郷村に村落調査に來村しているが、このころから民俗、考古学の研究にも意を注ぐようになつてゐる。

村長時代、森林組合の設立や、當時としてはめずらしい観光事業に力を入れるなど、産業の振興を図り、村づくりに尽力するなど、行政職としてもその才能を發揮してゐる。

## 学校林で中学校を建設

終戦後、学制改革で六・三制が施行され、各市町村では新しく中学校を建築することになつた。それは疲弊した終戦直後のことであり、多くの町村では大きな悩みとなつてゐた。しかし、津久井郡内郷村は困らなかつた。およそ四〇数年前、児童たちが植付けた学校林が役に立つたのである。内郷小学校の学校林は、戦時中の供出のため再三伐採した後であつたが、新中学校建設資金およそ六〇〇万円をねん出しうる樹林が残つていた。

昭和二四年（一九四九）四月、上棟式に臨



当時の内郷小学校



寸澤嵐石器時代住居跡

大正五年（一九一六）には近隣の村々にも結成された青年会と共同して津久井郡北部連合青年会大運動会を開催するまで発展し、一郎はその主催者の中心となつて活躍している。彼の創立した青年会が発端となつて、内郷村はもとより近隣の地域の活性化や人づくりに大きく貢献しただらうことは想像に難くない。

一郎は、大正一三年には二〇余年にわたつて勤務した内郷小学校を去つてゐるが、このとき、彼は「やるべきことはすべてやつた」と述懐している。

この学校林による新制中学校校舎建築の話題は、ラジオ、新聞等で全国に報道された。一郎は、これらの功績により、昭和二五年三〇〇〇年前の住居跡を見つける、近所の青年たちの協力を得て発掘調査を行つた。

翌昭和四年、一郎は推されて内郷村村長

稱賛したこという。

この学校林による新制中学校校舎建築の話題は、ラジオ、新聞等で全国に報道された。一郎は、これらの功績により、昭和二五年三〇〇〇年前の住居跡を見つける、近所の青年たちの協力を得て発掘調査を行つた。

長谷川一郎は、生まれ故郷の貧しい山村で村づくり、人づくりのため、常に先頭に立ち活動し、実践した。その意味で一郎は、理論よりも行動で教育を実践するタイプの教育者であった。学校林の経営、墓参による德育、青年会の結成、遺跡の発見、そして自ら育てた学校林で新制中学校を建築するなど極めて多彩な活動を通して、「村治は教育也」と実感した彼の生涯は、「郷土に生きる教育家」として、将来に語りつがれていくに違ひない。

昭和三九年（一九六四）没、享年八五歳

【参考文献】  
創立百周年記念誌刊行委員会『内郷小学校百年のあゆみ』  
津久井町郷土誌編集委員会『津久井郡青年団史』  
長谷川一郎『学校林を語る』  
津久井郡勢誌刊行委員会『津久井郡勢誌』  
神奈川県『神奈川県統計書』

（神奈川県立文化資料館 永野勝康）